
お使いから護衛まで

揉め事処理屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お使いから護衛まで

【Nコード】

N8212H

【作者名】

揉め事処理屋

【あらすじ】

パツと見は普通の高校生三条遊馬。でも彼は「なんでも屋」を営んでいた。その仕事内容はお使いから護衛まで?! 今日も相棒の御巫桜とんでもやります!

作者が初めて書く小説です。読み終えた後に御感想をいただければ幸いです。

第1話

「ふあゝあ」

おつと失礼、俺の名前は三条遊馬^{さんじょうあすま}。どこにでもいる普通の高校1年生^{せい}。というわけではない。

とは言ってもパツと見はそこらへんの高校生と変わらない。

黒髪、黒い瞳、平均的な顔に身長、そして学ラン。俺が他の奴らと違っているところ、それは…

「おはようございます」

振り返ってみるとそこには一人の女の子がいた。彼女の名前は御巫^{みかなぎ}桜^{さくら}、

黒の長髪、整った顔立ち、大和撫子という言葉がよく似合うと思う。

運動も勉強もなんなくこなす、まさに容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能の完璧少女である。

「おはよう」

「どうでした？昨日のストーカー退治は」

「無事解決、まったくあんな夜遅くに出んでもいいだろうに」

そう俺が他の奴らと違っているところ、それは頼まれればなんでもやる「なんでも屋」を

営んでいることである。昨日はある女子高生の依頼でストーカー退治をしていた、そのおかげで寝不足気味である。

「なんか依頼入ってる？」

「落書き消しが1件に、飼い犬探し1件、引越しの手伝いが1件です」

「…」

「どうします？全部やりますか」

「うん…」

まあこういう仕事のが多い、大きな金は入らないがこういう仕事もこなしていけないと生活できないのだ。両親は数年前に死んだ。親

戚という親戚もなく、いま俺は一人暮らしをしている。だから俺は自分で学費や生活費を稼がなくてはならないのだ。桜にはその仕事の手伝いをしてもらっている。桜との出会いも仕事でかわった事件がきっかけだ。

「では、そのように」

「いつも悪いね」

「そんな、私がしたくて遊馬さんを手伝っているんです。気になさらないでください」

と彼女は微笑みながら言った。彼女の手伝いのおかげで俺の仕事はかなり効率が良くなった。

「ありがとう。しかしもっとまとまった収入がほしいな。今月もきつつきつだよ」

昨日の仕事以外お使いや掃除、いなくなったペット探しなど、小さな仕事しかなかった。

今後のことを考えると少し余裕がほしかった。とその時、桜の携帯が鳴った。

「もしもし、はい…はい…少しお待ちください。遊馬さん仕事の依頼です」

「どんな？」

「ある人物の護衛をしてもらいたいと」

「護衛か…金にはなるだろうけど、危ないことはあんまりたくないんだけどなあ。

依頼主は？」

「それが、私たちの学校の校長先生です」

「校長が？校長がなんで護衛の依頼なんかを俺に？」

校長は俺がなんでも屋を営んでいることを知っている数少ない人物だ。

「さあ…ただ話だけでも聞いてほしいと」

「わかった。とりあえず話を聞いてみよう」

「わかりました」

桜はそのことを校長に伝えた

「学校着いたら校長室にきてほしいとのことですよ」

「うし、じゃあ学校に急ぎますか」

「はい」

俺たちは学校に向かった。

第1話（後書き）

文章能力のない作者が初めて書く小説です。初めてなのでいろんな小説をまねしながら書いていきます。あたたかい目で見守ってください。

第2話

てんせいこうこう
天星高校

これが俺たちの通う高校である。都内にある学校で、学力はなかなか高い。

この学校の特徴は海外からの留学生を積極的に受けお入れているところである。なのであたりを見回すといろいろな国の人の顔を目にする。

1学年300人くらいのうち30人くらいが留学生だ。

俺と桜が校門を抜けようとした時

「おーい、遊馬」

声をかけられた方を見るとそこには俺の幼馴染の遠見兼一とおみけんいちがこちらに向かって走ってきた。

「うゝす、兼一」

「おはようございます、遠見さん」

「おはよう、遊馬、御巫さん」

兼一は幼稚園の時からにつきあいで、昔からよく遊んでいた。その関係は今でも続いており、

桜と同じくらい信頼のおける友人である。ちなみに俺たち3人は同じクラスだ。

「数学の宿題やったか遊馬？」

「宿題？なにそれ、おいしいの？」

「遊馬さん、宿題はおいしくないですよ。出さないにがい思いをするときがありますけど」

「おお、桜うまいこと言うねえ」

「感心してる場合か、おまえこの前も提出してないだろ」

「まあ、なんくるないさあ」

などと談笑しながら玄関に向かう。

「俺たちこれからちよつと校長室に用事あつから、先生に言っとい

てくんねえか」

「校長室？」

「ああ、校長は俺の親と昔からの知り合いだからな。少し話があるんだと」

これは嘘ではない、実際俺は校長のこと子どもの頃から知っていてよく遊んでもらっていた。

「わかった、伝えとくよ」

そう言っただけで兼一は教室へ歩いて行った。

「さて、俺たちも行きますか」

「はい」

俺たちは校長室へ向かった。

コンコン

「失礼します」

「失礼します」

カチャ

校長室はなかなか広く、落ち着いた造りだ。

「待っていたぞ、遊馬、御巫君」

これがうちの学校の校長、小早川裕太郎こはやかわゆうたろう

年の割に若く見える人で、おじさんと言えはいいのかおじいさんと呼べばいいのかわからない。

ふと視線をずらすと、金色の長い髪、青い瞳、桜にひけをとらないくらい的美少女が立っていた。目が少しつり目なせいか少し気の強そうな雰囲気がある。

「紹介するよ、こちら今日から留学生としてこの学校に通うことになったユリア・バルバートル君だ」

「ユリア・バルバートルよ」

校長に続いてユリアが言った。

「ども、三条遊馬です」

「はじめまして、御巫桜です」

俺たちも軽く自己紹介をする。

「彼女のお父さんはフランスの外交官でね。お父さんの仕事の都合で日本に来たんだ。」

今回君たちにはバルバートル君の護衛をしてもらいたい」

「しかし、なんで護衛なんか…」

「うむ、彼女たちの来日の表向きな目的は国際交流ということになっている。しかし、真の目的はある犯罪組織の調査にある」

「犯罪組織？」と桜が聞く

「フランスと日本の間で武器や麻薬などの密輸を行っている組織だそう。その調査を悟られないためにも表立って護衛をつけることができないのだよ」

「だから俺たちに」

「うけてくれないか？」

「お引き受けします！」即答だった
するとユリアが

「い、いいのあなたそんなに簡単に引き受けて?!」
と慌てて言った

「いや今月厳しくてなんでもいいから仕事しないと生活できないんです…」

と、とても暗い感じで答えた

「そ、そう」

「安心しろ、報酬の方は期待してくれていい」

「ありがとうございます」

俺には校長が神に見えた

「では頼むぞ遊馬」

「はっこの三条遊馬全身全霊をかけてユリア・バルバートルさんの護衛務めさせていただきます！」

こうして俺たちは護衛の依頼をつけることになった

第2話（後書き）

2話目です

小説書くのってホント難しいですね（汗）

こんな小説ですが最後までへこたれずに書いていきたいです

第3話

俺、桜、バルバートルさんは教室に向かうため廊下を歩いている。

バルバートルさんは俺たち同じクラスだった。

「護衛をつけるからにはあなた腕には自信があるのよね?」

とバルバートルさんが聞いてくる

「いや、ない」

俺はきつぱりと答える

「…最近どんな仕事をしたの?」

「最近ねえ…」俺が思いたそうとしていると桜が

「今週はストーカー退治と家の掃除とお使い。先週は壁紙と障子の張り替え、子守にお使い。2週間前は野球部の助っ人、庭の雑草取りとお使い。1ヶ月前はお使い…」

「もういいわ…、ストーカー退治以外家の手伝いみたいなことしかしてないじゃない。」

なんで毎週お使いしてんのよ、あなた小学生?」

「貴重な収入源なのに…」

お使いの収入は全体の収入の3割に相当する。お使いがなければ生きていけない、お使い万歳。

「はあ、あなたで大丈夫なのかしら」

「なんくるないさあ」

「なんくるないさあ?」

そんなこんなで教室についた。1年7組ここが俺たちのクラス、今は1時間目が始まっているだろう。確か1時間目は俺たちの担任の数学だ。

カラカラ

「せんせー校長に言われて留学せ…」

ヒュン ヒュン

すべて言い終わる前にいきなりチヨークが飛んできた。

「よっと」

俺はそれを難なくかわす。

「いたっ！」

しまった今日は後ろに人がいたんだった。振り返るとそこにはおでこに二つ白い点々がついた

バルバートルさんがいた。

「ちっ、はずしたか」

「先生今日は遅れるって兼一から聞いてますよね？」

「ああ癖だ、お前を見るとどうしても投げたくなっちまうんだよ」

「その癖なおすように努力してください」

「無理だ」

と、先生はきつぱりと簡潔におっしゃった。

このいきなりチヨークを投げてきた女性、この人が俺たちの担任神楽坂忍先生だ。らさかのぶ美人だが性格が少しガサツだ。キレイよりもカッコイイと言われる方が多いと思う。

「留学生がいきなりチヨークくらっちゃったじゃないですか」

「ん？留学生？」

「はじめまして…ユリア・バルバートルです…」

顔をきつらせながらバルバートルさんが言った。

「あっ忘れてた校長が留学生が来るとか言ってたな」

「私のこと忘れてたんですか！？しかもチヨークまであてるし！」

「わりいわりい、すっかり忘れてた。あくでもチヨークがあたったのは三条のせいだぞ」

「なんでですか？」

「お前がよけるからあたっちまたんじゃねえか」

「いや、120%あんたが悪いでしょ。俺のせいにしないでください。そういえばこの前も他のクラスの奴にもあててましたよね？」

「うっし、留学生の紹介はじめぞ」

「話し変えやがった」

「大変ねこんな先生が担任で…」

「悪い先生ではないんですよ」

「チヨーク投げてこなければね」

「いつもなの？」

「遅刻したときとあの人の気分次第だね」

まあ俺は主に遅刻のときに投げられる。自分で言うのもなんだが遅刻常習犯なのだ。（仕事に関係していることが多い）

「何してる、そんなとこにつったってないで早く教室入れ。留学生をみんなに紹介すつから」

神楽坂先生呼んでる。あんたの話をしてたんだよ。

「じゃ入りますか」

「ええ」

これが神楽坂先生とバルバートルさんの出会いだった。バルバートルさんが教室に入ったところで俺は彼女に

「ようこそ、我が1年7組へ」

第4話

「フランスから来ました、ユリア・バルバートルです。こちらでの生活にまだ慣れていないのでいろいろ教えてもらえるとうれしいです。よろしくお願いします」

「うおー！」「」

バルバートルさんの自己紹介した直後、うちのクラスの野郎どもの雄たけびが教室に響き渡った。

バルバートルさんを含む女子全員が引いている。

「うちのクラスの男どもはこんなに女子に飢えていたのか？」

俺がつぶやくと、隣の席の桜が

「バルバートルさんはお綺麗ですししょうがないですよ」

と、答えた。

「うるさいぞお男子。バルバートルが怯えてるじゃねえか。テンション下げろ」

と先生が注意する。少し落ち着く男子。

「おし、質問タイム行くぞお。質問がある奴手上げる」

勢いよく手を挙げる男子たち。

「じゃあ、五十嵐^{いがらし}」

「はい！日本語がすごく上手ですけど、どこで覚えたんですか？」
一人の男子が質問する。

「父の仕事の都合で外国に行くことが多くて、日本にも何回か来たことがあったんです。その時に日本に興味をもって、日本語を勉強したんです。フランス語と日本語のほかにも英語とドイツ語を話すことができます」

「おー」「」

バルバートルさんの答えにクラスみんなが感心する。

すごいな、俺なんか英語もまともにわからないのに。英語はいつも赤点ギリギリだ。

「よし次木村」
きむら

「はい、バルバートルさんの趣味はなんですか？」

「趣味ですか？読書と音楽を聴くことですね。休みの日は小説を読
んですごすことが多いです。日本の本や音楽は好きです」

読書かマンガくらいしか読まないな。音楽も聞かないな、ていうか
聞けない。なぜかというオーディオ機器のたぐいがないからだ。
買う金がないからだ。なんか悲しくなってきた…。

「次が最後な。うーん、遠見お前だ」

「はい！好きな男性のタイプは？！」

兼一が鼻息を荒くして質問する。その質問に男子の緊張感が高まる。
兼一、顔怖いよ。一瞬だけど友達やめなくなっちゃったよ。

「好きな男性のタイプ？！えーと、優しくて、強い人が好きです」

「強い？」

「ええ、どんな事にも負けない強い心を持った人です」

自己紹介も終わり1日の学校生活も終わりを迎えた。

バルバートルさんの周りから人が絶えることはなく、ほかのクラス
からも留学生の噂を聞きつけてバルバートルさんを見に来る人もい
た。バルバートルさんも終始笑顔を絶やさなかった。

俺が見た限りではバルバートルさんの登校初日はいい形で終わった
と思う。

俺と桜は今、バルバートルさんを彼女の家に送り届けている途中だ。
俺たちが彼女を護衛するのは登下校のときと学校内だ。彼女は今フ
ランスの領事館で生活しているらしい。領事館の中ならもとから警
備が厳しいので護衛は必要無いとのことだ。そのことに内心おれは
ほっとしている。24時間つきつきりで護衛なんかしてたら身がも
たない。

帰り道の半分くらいに来たところで俺の携帯が鳴った。

「もしもし」

『あぁ3丁目住んでるトメだけだね。遊馬君にちょっとお使いを頼みたいんだけど』

「いいですよ。何を買えばいいんですか？」

『大根とネギと味噌を買って来てほしいのよ』

「わかりました、後で届けに行きますね」

『ありがとうね』

「それじゃあまた後で」

俺は携帯は携帯を切り

「ごめんバルバートルさん、ちょっとスーパーによつていいかな？
お使い頼まれたから」

「別にいいわよ。貴重な収入源ですものね」

「ありがとう」

俺たちはスーパーに行つてトメさんに頼まれたもの買った。

「トメさんは足が悪くてね。なかなか外に出れないんだ」

「そうなの…」

「だから俺にお使いを頼むことが多いんだ」

トメさんの家は帰り道の途中にあった。

「トメさん、買ってきたよ」

「ありがとう、遊馬君。これ、依頼料」

「まいど」

「また頼むよ遊馬君」

俺たちはトメさんに買ったものを届け、バルバートルさんの家に着いた。

「今日はありがとう。明日からもよろしくね」

「じゃあまた明日」

「ええ」

「さようなら」

「とりあえず今日は何もありませんでしたね」

「初日からなんかあったら大変だよ」

「そうですね」

「このままずっと何もなければいいんだがな」

その時、桜の携帯が鳴った。

「もしもし。後藤警部ごとうどうなさったんですか？…はい…わかりました。遊馬さん後藤警部が遊馬さんにかわってほしいと」

「わかった。お電話かわりました」

『仕事を頼まれてくれないか？』

「なにかあったんですか？」

『武装グループが人質をとって立てこもっている。その人質の救出してほしい』

「それは警察の仕事では？」

『こちらの準備にかなり時間がかかる。それに、相手の装備、能力とも我々の手に負えるものではない』

「そんなの民間人に相手させていいんですか？」

『大丈夫だで俺の中おまえは民間人ではない』

「ひどっ！！」

『で、やるのかやらないのか？』

「やりますよやればいいんですよ」

『よし。現場は熊沢電工の支社に立てこもっている。頼んだぞ』
「了解」

電話を切り桜に返す。

「仕事ですか？」

「ああ、面倒なこと頼まれたよ。依頼料水増ししといてくれ」

「くすっ、わかりました」

「さうて久しぶりのでかい仕事だ。気張っていきますか」

俺は現場に向かった。

第5話

今、後藤警部に教えてもらった現場に来ている。桜には荷が重そうだから桜は少し離れた場所に待たせている。警察はまだいない。現場は8階建てのビルで、出来てまだ間もないらしい。

「さてと、どうやって入りましょうかね」

桜にもらった建物の見取り図をみながら、そのように侵入しようか考える。桜はパソコンの扱いも神業的で、その情報網は至るところにひろがっている。彼女に調べられない情報など無いといっても過言ではない。この建物は大きな会社の支社ということだけあっていたるところに防犯カメラが設置されている。これらは、もうすでに武装グループの手に落ちているだろう。

見取り図があつてよかった。

「ぐずぐずしてもいけないし。行きますか」

俺はもう一度持ち物のチェックする。今の俺の服装は某有名忍者マ
ンガの一般的な忍者の服装をイメージしてもらいたい。背中には忍
刀を2本背負っている。日本刀よりだいたい短い刀だ。
がたな

この格好からわかるように俺は忍者だ。

とはいっても分身したり、水の上を走ったりすることはできない。

手裏剣やクナイは使うけどね。

俺はトイレの窓から侵入し、防犯カメラの死角を通りながら人質を
探そうと…

「誰だ!？」

いきなり見つけた。

「運悪すぎだろ、俺」

「動くな!動くと撃つぞ!」

男が銃を突き付けてくる。日本ではお目にかかることのなさそうな

銃だ。あれで撃たれたら痛そうだな。

「悪いけど、ここで捕まるわけにはいかないんでね」

俺は刀を引き抜き一気に相手との距離をつめる。

「は、速い！」

驚いている男に刀を振るう。もちろん峰うちだ。

「がっ」

男は気絶した。

「だめですよ、こういうときは迷わず撃たなきゃ。しかっしこんなに早く見つかったらうとは。もっと注意してこ」

ここはビルの5階。ここに来るまでに4人倒した。ようやく人質が捕まっている部屋の前まで来た。中をのぞくと結構な人数が捕まっている。この人数を見つからないように連れ出すのは難しそうだ。

「全員倒さないとダメか」

部屋の中にいる犯人の人数は6人。倒せない数ではない。

煙幕を取り出し部屋に投げ入れる。この煙幕は特別製で煙がすぐに部屋に充満する。

「煙幕か?!」

犯人達は少し驚いたようだったが、取り乱した様子はない。しかし、それでも一瞬隙ができる。その隙を見逃さず近くにいた一人を刀で倒し、こちらに気付いた一人に手裏剣を投げつける。手裏剣は銃を持つている方の腕に刺さり男は銃を落とす。すかさず刀をたたきこむ。そんな感じで次々に男たちを倒していく。煙が晴れたころには6人の男が気を失って倒れていた。

「よし」

人質を見るとなにが起こったかわからないといった顔をしている。

「大丈夫ですか？」

俺は人質の一人に声をかける。

「は、はい」

「人質はこれで全員ですか？」

「はい、ここにいるのが全員です」

「わかりました、今から縄をほどくのでじっとしててください」

俺はクナイで全員の縄を切りにかかるうとするが、誰かがこちらに近寄ってくる気配を感じた。一人ではなく複数人だ。

「みなさん出入り口から離れて耳をふさいでいてください」

人質を部屋の隅に寄せ、懐からあるもの取り出しドアが開いた瞬間そとに投げる。鼓膜がが破れそうなくらいの大きな音がした。

「きゃっ」

「うおっ」

人質の人も耳を塞いでいてもこの音にはビックリしたらしい。俺が投げつけたものは「スタングレネード」、大音響で相手を無力化させる武器だ。俺もこれを使い始めたころは、いつもこの音にビビってた。えっ？忍者がそんなもの使っていいのかって？イメージ的にあわないんじゃないかって？

…いいじゃん便利なんだから使ったって。たぶん忍法なんかよりずっと効率いいよ？忍者だって時代の流れに乗らないとね。

出入り口の外を見てみると6人の男が倒れていた。ほかに人の気配はない。これで全員のようだ。

「今のうちだな」

クナイで人質の縄を切り、逃げる準備をしていると外からサイレンの音が聞こえてきた。

「やっとう到着か、みなさんもう大丈夫ですよ。これからそとに出しましょう」

「ありがとうございます。あの…あなたは一体…」

「俺はただのなんでも屋ですよ」

人質を警察に任せ、俺は現場を離れた。

「おつかれさまでした」

桜が声かけてくる。

「桜もな」

「私は何もしてませんよ」

「いいや、あの見取り図がなかったら。こんなに早くは終わらなかつたよ。ありがとう」

「遊馬さん…ふふ、どういたしまして」

「さて、帰りますか」

「はい」

もうすっかり日の暮れた道を俺たちは歩いていく。

第5話（後書き）

やっとアクションシーンを書くことができました。
この小説に対するご意見、ご感想をお待ちしています。

第6話前篇

「これなんてどうかしら？」

「そうですね…、こつちもいいんじゃないですか？」

「それもいいわねえ」

「…」

今日は土曜日。ここは俺たちの住んでる町にある大型デパートだ。

今はその洋服売り場に俺、桜、バルバートルさんの3人で来ている。俺たちの住んでいる町、時雨町しぐれちょうは人口がそれほど多いわけではないのにこういったデパートなどが充実している。

なぜ俺たちがここににいるかという、それは昨日の学校にさかのぼる。

「明日、買い物に出かけたいんだけど」

昼休み、昼ごはんを食べようとしているとバルバートルさんが声をかけてきた。

「だから、俺に案内しろと？」

「ええ護衛を兼ねてね」

「わかった。桜も一緒にいいかな？」

「むしろそうしてもらったほうがありがたいわ」

「ということだ、桜明日大丈夫だよな？」

「はい」

「じゃあ、明日よろしくね」

というふうなことがあり、いまにいたるわけだが。女子の買い物というのはこうも時間がかかるものなのか？何時間服見てれば気がすむんだ？俺が服買う時なんて長くて1時間しかかからないってのに。

「ねえ三条君あなたはどっちがいいと思う？」

「うーん、右かな」

両手に服を持ったバルバートルさんに聞かれ彼女が左手に持っている服を選んだ。

「やっぱりこつちか。うん、これを買っわ」

やっと決まったらしい。これで終わると思ったら、急に腹が減ってきた。時計を見るともうとつくに1時を過ぎていた。

「あら、もうこんな時間？どこかでお昼食べましょうか」

「それだったら、この下の階にレストランがありますよ。今の時間ならすいてると思いますし、そこで食べませんか？」

「賛成！」

「そうね、そうしましょう」

といううことで、俺たちはおそい昼食をとることにした。

「ふう、ごちそうさま」

「なかなかおいしかったわね」

「ええここのレストランはおいしいって結構有名なんですよ」

「これからどうするの？」

「そうねえ、少し小物が見たいわ」

「えっまだ買っんですか！？」

俺の長い1日はまだ終わりそうにない。

俺たちがデパートの中を歩いていると

「遊馬お兄ちゃん！！」

小さな女の子に出会った。

「こんにちは、歩美ちゃん。お父さんたちと買い物？」

「うん！今日お父さんもお母さんもお仕事お休みだからお買い物にきたの！」

この子は神原歩美ちゃんかんばらあゆみ。俺の家の近くに住んでいる女の子で、確か今小学3年生だ。歩美ちゃんのお父さんとお母さんは共働きで、

たびたび俺が彼女の面倒をみることがあった。

「遊馬くんこんにちは」

「こんにちは、神原さん」

彼女の後から来たお父さんと軽く挨拶を交わす俺。お父さんの隣のお母さんとも会釈を交わす。

「遊馬君たちも買い物かい？」

「まあそんなところです」

「遊馬君も隅に置けないわね、両手に花じゃない」

「そんなじゃないですよ」

俺がお父さんたちと話をしていると

「遊馬お兄ちゃん『りょうてにはな』ってなに？」

と歩美ちゃんが聞いてくる

「うーん、歩美ちゃんが大人になればわかるよ」

困ったように笑いながら俺は答える。

「それじゃあね遊馬君」

「また今度なにかあつたらよろしくね」

「お兄ちゃんまたね」

「またね歩美ちゃん」

俺たちは神原一家と別れ、買い物に戻った。

「今日はありがとう。三条君、御巫さん」

「どういたしまして…」

バルバートルさんの買い物が終わわり、俺たちはデパートの出口に向かっていている。買い物が終わってみると買った物の量は結構なもので俺は両手に花ならぬ両手に紙袋状態である。速く家に帰りたいなどと思いながらエレベーターに乗り、1階に降りる。

「きゃああああ」

エレベーターを降りるといきなり悲鳴が聞こえた。なんでこのまま終わらせてくれないんだよ…。

「なに?!今の悲鳴!?!」

「なにかあつたんでしょか?」

「なにかあつたんだろうな」

悲鳴に驚いているバルバートルさん、これといって驚いていない俺と桜。

「なんであなたたちそんなに落ち着いてるの!?!少しは驚くでしょう?普通!」

「「なんでも屋だから?」」

「なんで疑問形なのよ…それとハモるな」

「とりあえず見てみよう」

俺たちは物陰に隠れて悲鳴の聞こえたほうをしてみる。

見てみるとそこには一人の中年の男がたっていた。ただの中年の男が立っているだけでは誰も驚かないだろう。問題はその男が手に持っている物にあった。男は右手に包丁、そして左手には…

歩美ちゃんをかかえていた

第6話後篇（前書き）

小説に関するご意見、ご感想お待ちしております。

第6話後篇

「あの子、さっきの!」

驚くバルバートルさん。俺も声には出さないが相当驚いている。桜も同じだ。

「歩美!!」

「助けて!お父さん!お母さん!」

「お願い!歩美を放して!」

「うるさい!騒ぐな!」

歩美ちゃんたちの声が聞こえる。男はだいぶ興奮しているようだ。周りの人たちはうごけないでいる。

「下手に動いてみる、このガキを殺すぞ!」

そう言つて男は包丁を歩美ちゃんにむける。

「やめて!」

涙を流しながらお母さんが言う。

「こりやまずいな」

と、様子を見ながらつぶやく。

「なんとかできないの?」

「下手に動くと歩美ちゃんがあぶない。でも動かなくてもこのままじゃあぶないな」

考えて、思いついた方法は

「バルバートルさん、携帯あるよね?」

「あるわよ」

「じゃあエレベーターに戻って警察に連絡して。桜今から俺は気付かれないように相手の側面に移動する。合図したら男の注意をひいてくれ。男が桜に気を取られているうちに俺が歩美ちゃんを助ける」
「わかりました」

「わかったけど、できるの？そんなこと」

バルバートルさんが不安そうに聞いてくる。

「まっやるしかないでしょ。じゃあ頼んだよ二人とも」

うなずく二人。それぞれ行動を開始する。

デパートの中は身を隠すのには困らなかったで、男に気付かれずに動くことは難しくなかった。最適な位置に移動し桜に合図をだす。桜が声を出し、男の注意がそちらにむく。

俺は商品の間を抜け男に肉薄する。男がこちらに気付いた時にはもう相手の右手に手刀をいれ、包丁をおとし、関節をきめ左手の力が抜けた瞬間歩美ちゃんを助け出し抱きかかえて男から距離をとった。

「遊馬お兄ちゃん！」

「もう大丈夫だよ。ほらお母さんたちのところに行きな」

「うん！」

お母さんのところに走っていく歩美ちゃん。

「てめえなにしゃがる！！」

包丁を拾い俺にむける男。

「あなたこそなにをしてるんですか、あんな子にそんなのむけて恥ずかしくないんですか？」

「うるせえ！」

男は包丁で襲いかかってくる。俺は包丁を交わし鳩尾に突きを入れる。

「ぐっ」

男は崩れ落ちる。

「せっかくの家族団欒の時間を邪魔するような無粋なまね、するもんじゃないですよ」

「ありがとう、遊馬くん……ありがとう……」

歩美ちゃんのお父さんが涙を流しながら俺に感謝してくれている。

「俺だけの力じゃないですよ。彼女たちがいてくれたおかげですよ」
あの二人がいなければここまでスムーズにことは進まなかっただろう。

「そうだね、君たちもありがとう」

「いえ、そんな…私は何も」

「私も遊馬さんの指示に従って動いただけですから」

謙遜しながら二人は答える。そこまで謙遜しなくていいと思うんだけどなあなんて考えていると、クイクイと服が引っ張られる。

「ん？」

「遊馬お兄ちゃん」

「歩美ちゃん」

俺はしゃがんで視線を歩美ちゃんにあわせる。

「歩美ちゃん、怖かった？」

「うん…、すごく怖かった…」

「そっか…」

俺は彼女の頭をなでてやる。少しでも気持ちいが和らぐように。

「えへへ、お兄ちゃんになでてもらうちゃった」

歩美ちゃんがぐすぐつたそうに言った。

「いやだった？」

「ううん、すごくうれしい」

「そっか、よかった」

「お兄ちゃん…」

「なに？歩美ちゃん…」

言い終わる前に彼女の唇が俺の頬にふれていた。

「ありがとう、お兄ちゃん。大好き！」

数秒間思考停止する俺。あらかじめいつときますが俺は断じてロリコンじゃありません。いやだって相手が小学生だからって、いきなりこんなことされればどうしたらいいかわかんなくありません？
思考が正常な状態にもどる。

「歩美ちゃん、こういう事するのは大人になって旦那さんになって

くれる人とじゃなきゃダメだよ」

「じゃあ大人になったらお兄ちゃんのお嫁さんになる！」

「えっ」

「嫌なの……」

「うぐっ」

今にも泣きだしそうな顔をする歩美ちゃん。困った非常に困った。歩美ちゃんは泣きだすとなかなか止まらないだよなあ。

「ありがとう……歩美ちゃんすごくうれしいよ……」

「やったー！」

はあ……もつとなんか違う言い逃れ方があっただろうに。俺のバカ。

「よかったな、歩美」

「遊馬君、歩美をよろしくね」

あんたら、人事だと思つて。

「へえ、三条君つてそういう趣味だったんだ。こういうのってロリコンつて言うんだっけ？」

「よかったですね遊馬さん。お幸せに」

バルバートルさん蔑むようなま目で人を見るのはやめてください。

俺はロリコンじゃありません。桜さん、その笑顔すごく怖いです。

俺泣いちゃうよ？泣いちゃっていいですか？なんでだろう歩美ちゃんの満面の笑みがとても残酷に見える。

歩美ちゃんたちと別れ、俺たちはバルバートルさんを彼女の家まで送った。

「ありがとう、三条君」

「……どういたしまして」

俺はもうぐったりだ。今日はいろいろありすぎた。

「なんか、今日は三条君のこと見直しちゃったわ」

「そりゃ、どうも」

「もつと言んでくれてもいいんじゃない？」

「疲れすぎてそれどころじゃないんだよ」

俺の疲れは現在進行形でたまり続けている。隣にいる桜が負のオーラを流しっぱなしだからだ。桜の近くは周りより5 ほど低く感じられる。

「とりあえず今日はぐくろうさま。もう帰って休んで」

「そうするよ」

「じゃあまた月曜日に」

「ええ御巫さんも気をつけて帰ってね」

「はい」

「あのお桜さんそろそろ機嫌を直していただけないでしょうか？」

「あら、別に私はぜんぜん機嫌なんて悪くないですよ」

いや、そんな顔で言われても説得力ありません。

「はあ、いいよう。それよりも今日は誰かにずっとつけられてたなあ」

「やはりそうでしたか、よろしかったんですか？バルバートルさんに伝えなくて？」

「素人じゃなそうだけど武器は持つてなそうだったから、まだいいと思うけど。これから少し気をつけた方がいいかもな」

今伝えてバルバートルさんを不安にさせなくてもいいだろう。でもいつかは伝えなくてはならない時が来る。せめてその時までには普通に笑っていてほしい。だから俺がしっかりしなくてわ。

「私もいますよ」

「わかったのか？俺の考えていること」

「ええ」

桜にはかなわないな。俺もまだまだ半人前だ。

「これからもよろしく願います」

「はい、だから無理はしないでくださいね」

「善処します」

桜と一緒にならこれからもがんばれる。そう思った。

第7話前篇

1年7組の教室

「前から聞きたかったんだけど御巫さんはどうして三条君の仕事の手伝いをしているの？」

バルバートルさんは私に聞いてくる。遊馬さんは先生に呼ばれていてここにはいない。

「私は昔遊馬さんに助けってもらったんです。その恩返し……といったところでしょうか」

「へえ、どんなことがあったの？」

バルバートルさんは興味津々といった感じた。ガララ

「クソッなんで俺が先生の机の周りの掃除をせにやなんのだ」
教室のドアを開けて遊馬さんが入ってきた。

「この話はまた今度、遊馬さん昔の話をあまり知られたくないみたいで。照れ屋ですから遊馬さんは」

「照れ屋ねえ」

遠見さんと話している遊馬さんを見ながら言うバルバートルさん。

「じゃあ週末私の家に来ない？御巫さんとは前からいろいろ話したかったのよね」

「お邪魔でないのなら。私は大丈夫ですよ」

「決まりね」

こうして私はバルバートルさんの家に行くことになった。

「いらつしゃい、御巫さん」

「お邪魔します」

「さあ、こつちよ」

私はバルバートルさんに案内され彼女の家に入った。彼女の家はな

かなか大きくとてもきれいだった。

「ここが私の部屋よ」

「きれいなお部屋ですね」

「ありがとう。今お茶を持ってくるわ」

と言ってバルバートルさんは部屋を出ていく。彼女の部屋はかわいいぬいぐるみや小物などがおかれていて。とてもかわいらしい部屋だ。日々の彼女を見ていると少しイメージと違う。

「おまたせ」

バルバートルさんが戻ってきた。彼女の持っているお盆にはお茶菓子とお茶が入ったコップが二つのついていた。

「さっそくだけこの前の話の続き聞かせてくれない？」

「わかりました。あれは私が中学１年生のころでした」

（３年前）

中学に通い始めてからもう数カ月がたった。梅雨が明けてもう夏がすぐそこまで来ている。私は家の近くの公立高校に通っていた。普通の高校生ならこの時期はテストも終わり、夏休みに思いをはせているころだろう。でも、私にとって夏休みというのはうれしいものではなかった。夏休みに入るという事は学校が休みになるという事。つまり、否が応でも家にいる時間が増えるということである。

私は家が嫌いだ。

「ただいまもどりました」

住宅街の中にあるとても大きな日本の伝統的な屋敷。ここが私の家だ。私の家は古くから続く名家で政財界へもおおきな影響力を持っている。

「おかえりなさいませ、桜お嬢様」

奥から一人のお婆さんが出てきた。この人は私の身の回りの世話をしてくれる中川ヨネさんだ。^{なかがわ}私が生まれる前からこの屋敷で働いているらしい。

「ただいま、中川さん」

とくに感情を込めずに言い、廊下を歩いていく。つきあたりを曲がったところで和服を着た女性とはち合わせた。

「あらあなた帰ってたの」

女性はまるで汚いものを見るかのような目で私を見る。

「ただいまもどりました、お母さま」

「あなたにお母さまと呼ばれる筋合いはないわ」

そういつて去っていく。あの女性は御巫薫^{みかなぎあお}。私の父、御巫総司^{みかなぎそうじ}の妻で私の義理の母にあたる。そう私と彼女に血のつながりはない。私は父の妾の子なのだ。私の本当の母は私を生んですぐに亡くなった。だから私は母の顔がわからない。

そして私にはもう一人、血のつながりのない家族がいる。義理の姉、御巫葵^{みかなぎあおい}である。葵お姉さまはお母さまの子どもで生まれたときから病弱で、私はあまり会う機会がない。

「はあ……」

座布団に座り机に突っ伏してため息をつく。障子や襖^{ふすま}、桐箆^{きりだんす}など私の部屋はまさに日本の和室といった造りだ。年頃の少女が置くような小物などは一切ない。

（なんで私はここにいらんだろう？）

妾の子。それがこの家での私の肩書。どうがんばってもこの肩書が消えることはない。お母さまからしてみれば私は邪魔な存在でしかないだろう。あの中川さんだって私のことをよくは思っていないだろう。この家に私の居場所はどこにもない。私が生きていくにはここにいないしかない。でも…

（私が生きている意味ってあるのかしら…）

そんなある日のこと…。

葵お姉さまが倒れた。

第7話後篇

幸い葵お姉さまの命に別状はなかった。しかし、しばらくは絶対安静らしい。私は葵お姉さまの様子が気になって彼女のいる部屋の前まで来た。中からはお姉さまの声とお母さまの声が聞こえた。

『御心配おかけしてすみません、お母さま』

『無事でよかったわ。あなたになにかあったら私は…』

『お母さま…』

私には決してかけることのない優しい声でお姉さまと話している。私は部屋の前から走り去った。これ以上あの場にいることができなかった。

その日の夜。私の家。

「なんで葵があんなに苦しまなければならぬの？」

お母さまが私に聞いてくる。

「なんであなたじゃなくて葵なのよ！あの子は望まれて生まれてきたの。けどね、あなたはちがうのよ！あなたが死んでもね誰も悲しまないのよ！」

今までため込んでいたものを吐き出すかのように言ってお母さまは去って行った。私は何も言えず、お母さまがいなくなった後もしばらくその場から動くことができなかった。

目の前が真っ白になった。

気が付いたら私は町の中を歩いていた。ここまでどうやって来たか全く憶えていない。どこに行こうとしているかもわからない。ただ

歩いている。目は見えているはずなのに、あたりの様子を認識することができない。耳は聞こえているはずなのに、音が聞こえない。私の思考と五感はその機能をはたしていない。そのせいで後ろから近づいてくる人の気配に気づくことができなかった。

（ここは…）

私は今どこかのビルの一室のような所にいる。椅子に座らされてロ―プで縛られている。眠らされている間につれてこられたのだろう。私は誘拐されたらしい。でも今の私は声を上げる気も、逃げようとする気も起きなかった。ドアの向こうから男たちの声が聞こえる。『でかい家から出てきたからな、こりや相当身代金をとれそうだ』『でももし金が払われなかったら、あいつどうする？』『その時は死んでもらうさ』

これで死ぬる。私は男たちの会話を聞きながらそう思った。あの家が私のために身代金などを出すという事はないだろう。やっとあそこでの生活から解放される。

『なんだてめえは！？ぐあっ！』

急に外が騒がしくなった。

『この野郎！』

『ぐっ！』

『ぎゃっ！』

外が静かになつてドアが開いた。入って来たのは学生服を着た一人の少年だった。

「まったくいい大人がそろって女の子になにしようとしてんだか」少年はそう言い、私のロープをほどこにかかった。

「あなたは…？」

「ああ、君が車に連れ込まれるのを見てね。追いかけてきたんだよ。よし、ほどけた」

「なんで…なんで助けたりなんかしたんですか！？」

「えっ？」

少年は少し驚いている。

「やっとなら死ねると思ったのに……」

やっとなれると思ったのに。

「どうして死にたいと思ったんだい？聞かせてくれないか？」

少年は真剣な顔で聞いてくる。少しためらったが、私は話すことにした。どうしてかはわからないが、この少年には話してもいい気がした。私がお父さまの妾の子であること、お母さまとお姉さまのこと、あの家でのことをすべて話した。

「仮に家の人が悲しまないとしても、友達に悲しむんじゃないか？」話を聞いて少年は言う。

「私に友達と呼べる人はいません」

学校の人たちは、私が御巫の人間であるということと、妾の子であるという噂からか、私から距離を取っている。

「私は生きている意味がないんです」

そう言っつてうつむく。

「じゃあ俺が君の友達になるよ」

私は顔をあげて少年の顔を見る。少年は微笑んでいた。

「俺には生きている意味ってやつが必要かどうかはわからない。でも友達ってやつは絶対に必要だと思う」

私は黙って少年の話を聞く。

「俺には家族がない。何年か前に死にしまったんだ。最初は毎日悲しくてかなして仕方なかった。だけど、俺には幼馴染がいて、毎日のように一緒にいてくれた。そいつのおかげで俺は少しづつだけど毎日が楽しいと思えるようになったんだ」

少年は私の顔を見て言う。

「君もきつとそう思えるようになる。俺が手伝う。君の言う生きている意味ってやつが必要なら俺が見つかるまで一緒にいる。だから、もう少しだけがんばってみないか？」

彼の眼はとてもまっすぐに替えの決意が本物であることがわかる。

だから私はもう少し頑張ってみることにした。

「俺は三条遊馬。君の名前は？」

「御巫桜です」

これが私と遊馬さんとの出会いだ。私たちは夏休みに二人でいろんなことをした。遊馬さんの仕事を知ったのもこのときだ。

「遊馬さん、私に遊馬さんのお仕事お手伝いさせてください」

「いいのか？金が儲かるわけでもないし、もしかしたら危険な目にあうかもしれないぞ？」

「はい、それでも遊馬さんと一緒にいたいんです」

後から思うとなかなか恥ずかしいセリフだと思う。

「そっか、じゃあよろしくな桜」

といつても遊馬さんは気付いていないようだ

「こちらこそ、よろしく願いしますね遊馬さん！」

「というわけで、これが私が遊馬さんの仕事を手伝うようになった理由です。遊馬さんが今いなかったら私はいまここにはいません」

「あなたもいろいろあったのね御巫さん」

バルバートルさんは少し暗い顔をしながら言う。

「たしかにこれはあまり他人に話せる話ではないはね。御巫さんの家のことも事件のこともそうだけど、二人のセリフもだいたい恥ずかしいわよ。三条君がこの話をしたがないわけがわかったわ」

「そうですね私もなんか恥ずかしくなってきました」

「はつくしょん！」

「おや、風邪かい？」

「いや、違うと思う。それより、頼んでたものある？」

「ああ、あるよ。ちょっと待ってな」

ここは俺の知り合いが営む駄菓子屋だ。俺は今日あるものを買いにここに来た。

「ほれ、頼まれていたものこれで全部だよ」

「ありがとう、ばあちゃん」

この人は亀山幹子さんかめやまみきこ。なんでも俺の家はこの人から必要なもの調達しているらしい。俺が買ったものは武器だ。クナイに手裏剣、それに手榴弾や煙幕などだ。どこから手に入れるのかはわからないがこの人に頼めばたいがい物の物は手に入る。

「駄菓子屋でこんなの売ってていいの？」

「ほっほっ、おかげで助かってるだろ？」

「まっ、そうなんですけどね」

「今回はやけにいっぱい買ったね。そんなに大変な相手なのかい？」

「まだよくわかんないけど、備えあれば憂いなしってね。また来るよ」

「まいど、気をつけてな」

俺は駄菓子屋を出て家に向かう。そういえば今日桜がバルバートルさんの家に行くとか言っていた。二人で何を話してるんだか。今度桜に聞いてみよう。

「なあこの前バルバートルさんとなにを話してたんだ？」

「ふふっ、秘密です」

「秘密？」

「ええ、女の子二人だけの秘密です」

第7話後篇（後書き）

いかがでしたでしょうか？遊馬と桜の出会いを初の桜視点で書いてみました。今まで1番悩んだと思います。出来栄がすごく不安です。

第8話前篇

バルバートルさんがこの学校に来てから3カ月がたった。毎日のようにバルバートルさんは誰かにつけられているがなにもしてこない。バルバートルさんはこのことを知らない。今もクラスメートたちと楽しそうに会話している。

「なにじいっとバルバートルさんのこと見てるんだよ」

兼一が話しかけてきた。

「別にバルバートルさんを見てるわけじゃねえよ」

「嘘つけ。お前登下校の時も一緒じゃないか。この前なんか一緒に買い物にまで行ったそうだな」

その言葉を聞いてクラスの男子が殺気立つ。登下校のことはいいとして、買い物のは誰情報だ？

「お前ら付き合ってたのか！？付き合ってたんだろ！？」

俺の胸倉をつかみ大声で言う兼一。

バキッ

「黙れ」

俺は思い切り兼一の顔を殴りつた。

「普通殴る前に言わない……」

そう言つて倒れる兼一。このやり取りはバルバートルさんが転校してきてから週に3回くらいの割合で行われている。もううんざりだ。

「ほかに何か言いたいことある奴……いるか……？」

「いません……」

俺の問いにクラスの男子は息をぴったり合わせて言う。

「よろしい」

満足して俺は席に座りなおす。

「三条君って一体…」

「このクラスに三条君に勝てる人はいないわ」

バルバトルさんの言葉に一人の女子が答える。

「三条君、今日は迎えが来るらしいから送ってもらわなくていいわよ」

授業も終わりそろそろ帰ろうかという時にバルバトルさんが行ってきた。

「わかった」

「こつちに来てだいぶ経つけど何もないわね」

「俺としてはこのままずうっとないままの方がいいんだけどね。危険なめには会いたくないし」

忍者はもともと暗殺や情報収集などが本業だ。だからなるべく一戦交えるということはしたくない。

「それは私も同じよ、はやくこんなことから解放されたいわ」

「お父さんのほうはどうなの？」

「まだ何とも言えないらしいわ。組織の居場所もいまいちわかってないらしいし…」

残念そうな顔をしながらバルバトルさんが言う。

「そっか」

「まだまだあなたたちのお世話になりそうね」

「まっ依頼料も貰ってるし、最後まで付き合うよ」

「ありがとう」

俺たちが話していると校門の前に黒い車が止まった。

「迎えが来たようね、さようなら三条君」

「また明日」

そう言って教室出ていくバルバトルさん。それと入れ替わるよう

に桜が入ってくる。

「バルバートルさんを送っていかなくてよろしいんですか？」

「今日は迎えが来るんだってさ」

「そうですか」

俺は目線を窓の外に移す、バルバートルさんが車に乗るのが見えた。

「何か心配ごとですか」

俺の顔を見ながら桜が言う。

「なんでわかるんだ？」

「なんとなくですよ」

ほんと桜に隠し事は無理そうだ

「いやなんとなく嫌な予感がするんだ。これと言って理由はないんだけどな」

なにもなければいいんだが。

『1年7組の三条遊馬、至急校長室まで来なさい』

「遊馬さん……」

「ああどうやら俺の予感が当たっちゃったらしい」

「お迎えにあがりました」

「ありがとうございます」

車の前で運転手に挨拶をして私は車に乗った。すると突然車のドアが閉まった。運転席の方を見ると後部座席との間を透明な板でしきられている。

「これはどういう事！？」

運転手は何も答えない。

「ここから出して！」

私がそういうと、どこからかガスが流れ込んできた。

「なに…これ…」

私は睡魔に襲われ、そのまま意識を失った。

「娘を確保した、いまからそちらへ向かう」

誰かに連絡すると運転手は車を出した。

第8話前篇（後書き）

部活で忙しくてなかなか更新できませんでした。誤字脱字があったら教えてください。

第8話中篇

「ユリア、起きろ。ユリア」

誰かが私を呼ぶ声が聞こえる。目を開けるとそこには私の父、ルドルフ・バルバートルの顔があつた。

「お父さん……？」

「ああ、大丈夫か？」

「うん……」

少し頭がボオつとするが体の方に異常はない。

「ここは？」

「わからない……どこかの倉庫のようだが」

あたりを見回してみると、たくさんコンテナが置かれている。確かに倉庫のようだ。

「お父さんはどうしてここに？」

「車で移動している時に襲われたんだ。運転手は殺されてしまった」

「そんな……」

お父さんの運転手とは顔見知りだった。何度か話したこともある。とても明るくて面白い人だった。あの人が殺されたდანて。

「お嬢さんもお目覚めのようだな」

黒いスーツを着た男が私たちの方に歩いてきながら言った。男の後ろには数人の銃を持った男たちがいる。

「俺たちの事ずいぶん嗅ぎまわってみたいじゃないか。バルバートル外交官」

「私たちの方から会いに行こうと思ってたんだがな」

「いや、こちらとしてもあなたに会うつもりはなかったんだがね。

あなたがあまりにも頑張るもんだから、こちらから出向いたわけだよ」

「それは御丁寧にどうも」

お父さんは全く臆した様子はない。

「今日こうしてあんたに来てもらったのは、あんたが集めた俺たちの組織に関する情報すべてを消去またはこちらに渡してもらいたいからだ」

「……」

「こちらとしてはあまり面倒なことはしたくはないんでね。領事館に直接なんかするなんて事はしたくないんだよ」

「なるほど、だから私に情報の保管場所を言えってことかい？」

「そういうことだ。お決まりのセリフだがもし言わなかったらあんたら親子の命はない」

その言葉に私は怯えた。私も狙われているかもしれないという事はわかっていたつもりだ。だけど今とてつもなく怖い。

「娘だけでも助けてくれ……と言っても無駄なんだろうね」

「ああ、二人一緒だ。いいじゃないかもしもの時は一緒に女房のところにに行けるぜ」

「!？」

「あんたの女房、違法な銃が原因で死んだそうじゃないか」

そう私の母、フローラ・バルバートルはフランスで事件に巻き込まれて亡くなった。そのときにお母さんの命を奪ったのは、違法に所持されていた銃だった。その後からだ、お父さんがこの仕事を始めたのは。お母さんのような人を少しでも減らせるようにと。

「さあ、バルバートルさん。教えてくださいよ」

「……」

お父さんは何も言わない。その様子を見て男は懷から銃を取り出し私の額に突き付ける。

「じゃあまずお嬢さんから……」

「私の服の内ポケットの中だ」

ついにお父さんは答えてしまった。男は内ポケットに手を入れ、何かを取り出した。それは一つのUSBメモリであった。男はそれを

パソコンに挿し、中身を確認する。

「たしかに、これで間違いないようだ」
メモリをはずし懐にいれる。

「さてと、受け取るものは受け取ったし…消えてもらいますか」
その言葉を聞き、一斉に銃をかまえる男たち。なんとなくわかって
いた展開だ。

「すまないユリア、こんなことに巻き込んでしまって」

「お父さん…」

「フローラに申し訳ないよ」

「…」

私は何も言う事が出来なかった。私はここで死ぬのか。

嫌だ…まだ死にたくない…

「じゃあな、お二人さん。あつちで家族そろって仲よくしてくれや」
男たちが引き金を引こうとする。

「三条君…!」

「呼んだ？」

「へ？」

つい間の抜けた声を出してしまう私。次の瞬間上の方から無数の手裏剣とクナイが降ってきた。その量は半端ではなくまさに雨のようだ。

「ぐああああああ」

「ぎゃあああああ」

男たちの体のいたるところに手裏剣がささる。外れたものも地面に突き刺さっている。下はコンクリートなのに……。さらに驚いたことにあれだけの数の手裏剣を投げたのにすべて急所を外れていた。

「なんとか間に合ったな」

すたつと着地して学生服姿の三条君は言う。

「三条…君…？」

「なに？」

彼はいつもの調子で言う。

「どうしてここに？」

「校長に君のお父さんがさらわれたって聞いてさ、君もやばいと思って車のナンバー憶えてたから桜に調べてもらって追っかけてきたんだよ」

「車のナンバー？」

「ああ、なんか嫌な予感がしてね。いや、良い予感は当たんないのに嫌な予感ばっか当たっちゃうんだよ俺」

「そ…そう…」

私は顔を引きつらせながら言う。

「ところで怪我は？」

三条君は私たちに巻かれているガムテープを切りながら言う。

「大丈夫よ」

「ユリア…彼は一体…」

「えっと彼は…」

「なにをしている！！」

お父さんの質問に私が答えようとすると、男たちの仲間がこちらに向かってきた。

「その話は後で二人は後ろに…」

三条君はそう言って懷から何か取り出し、男たちに向かって投げると…

ドガン！！

爆発した…

「…」

私は啞然として声をなくす、お父さんも驚いているようだ。

なおも三条君は懷のものを投げる。

ドガン！ ドガン！ ドガン！

煙が消える頃には誰も立っていなかった。

「よしっ」

「よしっじゃなああああああい！！」

思わず突っ込む私。

「なに今の！」

「手榴弾」

彼はサラッと答える。悪びれた様子はない。

「いまさらだけどあなた一体なんなの！？」

「忍者だよ」

「忍者が手榴弾なんて使うの！？」

「使うよ、便利だし。ていうか忍者ってことは気にしないのね」

「うるさい！人が死んだらどうすんの！？」

「大丈夫この手榴弾は特別製だから。滅多な事がない限り人は死なない…はず」

「自信なさげに言うなああああ！！」

「そんなことより逃げるよ」

私の言葉を気にせずと言う。組織より彼の方が危ないと思うのは私だけ？そう思いながら彼についてお父さんと私は走り出す。

第8話中篇（後書き）

なんかこの展開ベタですかね？なにかアドバイスがあればお願いします。

第8話後篇

私たちは出口に向かって走っている。ここまで何度も敵に見つかってしまっただがそのたびに三条君が手榴弾で吹き飛ばしてきた。奇跡的と言うべきだろうか、吹き飛ばされた人たちに致命傷を負っている人はいないようだ。

「止まれ!!」

曲がり角を曲がった所でまた見つかってしまった。すぐに角に隠れる。通路には男が二人いる。

「あと少しなのになあ」

「また手榴弾使っちゃえばいいじゃない」

「さっきので最後。急ぎだったから少ししか持つてきてなかったんだよ」

「あれで少し？」

私は呆れることしかできなかった。

「どうするんだい？」

お父さんが三条君に聞く。すると三条君は背中に手を入れ刀を引き抜いた。私が知っている刀よりかなり短い。

「刀……」

「あなたそんなのも学生服の下に隠してたの？」

「学ランは男子学生の戦闘服だ。その可能性は無限大なのだよ」

三条君は自信満々に言う。

「そうなのか……!」

「お父さん、感心しないでください」

三条君の言葉にお父さんはすごく感動したらしい。興味津々といった顔で三条君の学生服を見ている。

「二人はここから動かないで」

そういつて三条君は角から飛び出し男たちに向かっていく。男たちも発砲するが三条君はそれを刀ではじき男たちに刀を振るう。

「ぐっ」

「がっ」

崩れ落ちる男たち。一瞬の出来事だった。

「すごい…」

思わずつぶやいてしまう。

「なんてことだ…!」

三条君が刀を見ながら言った。

「どうしたの？」

私が聞くと三条君は刀を私に見せた。刀の刃がところどころ欠けていた。

「くそっ！この刀高かったのに!!」

「…」

涙を流しながら言う三条君に私は何も言う事が出来なかった。

「あゝ三条君、後で私がお金を出してあげるよ」

その姿を見かねたお父さんが三条君にそう声をかけると、

「あなたは神様だ」

私の父は神になった。

「…はやくここから出ましようよ…」

「ここまで来れば大丈夫だろう」

倉庫を脱け出ししばらく来たところで三条君が言う。遠くの方からサイレンの音が聞こえた。

「俺が知り合いの警部さんに連絡しといたんだ」

三条君が説明してくれる。手際のいいことだ。

「さてと、そろそろ俺は退散しますかね。警察には俺のことは黙っておいてください。いろいろ面倒なんで」

「わかったよ」

「警察には誰か知らない人が助けてくれたって言っとくわ」

「ありがとう、それじゃあまた」

そう言うのとスツと三条君は消えてしまう。さすが忍者だ。

その後私たちは警察によって保護され、組織の人間は全員逮捕された。

私とお父さんが誘拐されてから数日がたち、私は久しぶりに学校に來ている。あの事件はニュースで報道され、学校の人たちはみんな知っているようで私にいろいろ聞いてきた。もちろん私を助けてくれた人物の正体は言わなかった。

「三条君改めてお礼を言わせてもらっわ、ありがとう」

「どういたしまして」

「御巫さんもいろいろとありがとう」

「はい、御無事で何よりでした」

私たちは今誰もいない学校の屋上にいる。さすがにクラスの人に聞かれるのはまずいと思ったからだ。

「あの後どうなった？」

三条君が私に聞いてくる。

「この前逮捕されたのは組織のまだ一部みたい。まだフランスにもいるみたいなの。だから、お父さんはフランスに戻るようになったわ」

「じゃあ、バルバートルさんも？」

「いいえ、私はこっちに残るわ。一応留学生だしね。この学校の女子寮に住むことになったの」

「この学校に女子寮なんかあったんだ」

「はい、遊馬さんの住んでるアパートよりもかなり良いところです
よ」

「…へえ…」

御巫さんの言葉に落ち込む三条君。見てると可哀相になってくる。
この様子を見ていると頼りになるんだかならないんだかわからない
でも…

「まあいいや…バルバートルさんまた何かあつたら言つてよ」

「ユリア」

「え？」

「私を呼ぶ時は今度からユリアって呼んで。私も遊馬君って呼ぶか
ら。桜さんもね」

「いいけど、どうして？」

「別に、ユリアの方が呼びやすいでしょ」

「ふん、わかったよ。じゃあユリア。また何かあつたら言つてく
れよ。ユリアの頼みなら一回くらいならタダで受けるよ」

ニカツと笑いながら遊馬君が言う。

でもこんな彼だから私はこんなに安心していられるのかもしれない。
彼と一緒になら大丈夫そう思える。もしかしたらこれが好きとい
う感情なのかもしれない。

「一回なの？」

「こつちも商売だからね。おつとそろそろ授業が始まりそうだ。教
室に戻るか」

「そうね」

私が遊馬君の後にについて屋上から出ようとすると、

「ユリアさん、ちょっとよろしいですか？」

「なに？桜さん。遊馬君行っちゃ…」

私が最後まで言う前に私の顔の横をなにか通り過ぎて後ろの壁に刺
さった。見てみるとそれはクナイだった。クナイがほとんど見えな
いくらいに壁に刺さってた。

「あなたがさっき考えていたことが本当なら、私はあなたを敵とみ

なします」

顔を青くしている私に御巫さんは微笑みながら言う。顔は微笑んでいるがその奥にはどす黒いものを感じる。桜さんってこんなキャラだった？これが所謂あれ？ヤンデレってやつですか？

「ハハッナンノコトカゼンゼンワカラナイワ」

怖くて片言になってしまった。

「そうですか、ならいいんです。さあはやく行きましょう」

「ソウネ」

桜さんと屋上から出る。私の遊馬君に対する気持ちは一生封印した方がいいかもしれない。少なくともこのお方の前では決して出してはならないと私は誓った。

「なにしてたんだお前ら？」

後からやってきた桜とユリアに聞く。

「ナンデモナイワ」

「女の子の秘密です」

と、二人は答える。

「またか、なんでユリアは片言なんだ？」

気になったので聞いてみる。

「キニシナイデ」

「さいですか」

なんとなくこれ以上聞いてはいけない気がした。

「さあ、教室に入りましょう」

桜が言う。

「そうだな」

教室に入って席に着き、視線を窓に移す。

「はあ……」

ため息をつく俺。この前ユリアを助けに行ったとき調子に乗って手榴弾を使いすぎた、そのおかげでこの依頼で受け取った金のほとん

どを使ってしまった。一時のテンションに身を任せるのはもうやめよう。そのうち死ぬかもしれん。

「はやく次の依頼入らないかなあ」

第8話後篇（後書き）

いかがでしたでしょうか。とりあえずこの話で一区切りということになります。なんか自分でも何やってんだか分からなくなってきました。

第9話前篇（前書き）

いや〜だいぶ更新が遅れてしまいました。なんか書いてくごとに作品がベタになっていく気がします。コメントいただけるとありがたいです。

第9話前篇

「財布が取られた？」

「そうなんだよ！！」

登校してきて早々兼一が俺に言ってきた。

「ふん」

「いや、ふんて…。もつとこう、心配とかしてくれないわけ？」

「なんで俺がお前の財布の心配なんかせねばならんのだ。お前がどこでのたれ死のうと俺には関係ない」

めんどくさそうに俺は答えた。

「ひどっ！俺たち親友じゃなかったのか！？」

俺の肩を揺さぶりながら兼一が叫ぶ。

「しんゆう？しんゆうって何？」

「親しい友と書いて親友だ！信頼し合う仲の良い友って意味だよ！

！国語辞典に載ってた！！」

「俺の辞書には載ってないなあ」

「じゃあ今載せよ！！あ行より先に載せてあげて！！」

「はいはい。で、その親友の俺にどうしろと？」

「俺の財布取り戻してくれ！」

そう俺に兼一は頼んできた。が、

「嫌だ、めんどい、疲れる」

即答してあげた。

「お願い！お願いします！全財産が入ってるんです！」

「全財産？」

それを聞いて少し考える。

「よし、取り返してきてやる」

「ホント！？」

俺の答えに目を輝かせて言う兼一。

「そのかわり中身の3分の1よこせ」

「えっ、金取るの!？」

「嫌ならいいんだぞ、そのかわり中身は全部帰ってこないかもな」

「…」

兼一は考え込む。

「わかった。それでいいから頼む」

「了解」

「兼一が言うにはこちら辺みたいなんだが」

俺は今兼一が財布を取られたという場所まで来ている。なんでもあいつから財布を取った奴らはこちら辺にたむろっていることが多いらしい。財布を取ったのは女子3人組、レディースって言うんだっただか？まあそんなのだ。結構有名な3人組みたいで桜に聞かなくても情報はすぐに手に入った。

俺が3人組を探して歩いていると公園の方からバイクのエンジンを吹かす音が聞こえた。かなり大きなマフラーをつけているらしくその音も大きい。

「あそこかな？」

音の方に向かい歩いていく。

「お、いたいた」

お目当ての3人組を見つけた。後ろ姿しか見えないが、髪形はロングにショート、ポニーテール。みんな髪を染めて特攻服を着ている。ロングが金髪、ショートが茶髪、ポニーテールが赤髪だ。

「すみませーん」

俺は3人に声をかけた。

「あん？なんだてめえは？」

ロングの子が俺を睨みながら言った。怖い…。

「自称親友の財布を返してもらいに来ました」

「財布？」

ロングの子が憶えてないといった顔をする。

「あの情けなさそうな奴のじゃない？」

シヨートの子が言う。

「私たちを見て、涙目になりながらガタガタ震えていた男だな。若干ズボンが湿っていた気がしたが」

「ああ、あいつか」

ポニーテールの子の言葉で思い出したらしい。情けなさすぎるだろ兼一。俺やっぱお前の親友にはなれそうにない…。

「思い出してくれたようなので、返してもらえます？」

「ああ、いいよ！」

いきなりロングの子が殴りかかってきた。俺はそれを最低限の動きでかわす。

「！？」

それを見て彼女たちは驚いている。

「こ、この！」

連続して俺に殴りかかってくるがすべてをかわす。

「あの、財布は…」

「うるせえ！！」

なおも連打は続く。蹴りも入ってきた。なかなか速いし威力もありそうだ。

パシィ！

「なっ！？」

俺は連打の中で拳をつかんだ。

「女の子の手はこんなことするためにあるもんじゃないでしょ」

「なんだと！？」

「女の子の手は人を優しく包み込むもんだ。人を傷つけるために使っちゃいけない」

言ってて恥ずかしくなるな。このセリフ。

「う、うるさい！てめえには関係ねえだろうが！おい、行くぞ！」
彼女たちはバイクに乗って去っていったしまった。

「あつ、財布返してもらってない…。しよがない追いかけつか」

スツと姿を消す。消えたわけではなく、すばやくジャンプしたただけだ。俺今すごく忍者っぽい。屋根伝いにバイクを追う。

第9話後篇

なんなんだあいつ？ただ者じゃないことは確かだけど、偉そうなことをベラベラと。何様のつもりだ？

「くそっ」

すごくイライラする。バイクに乗っていても気が晴れない。

私の名前は長岡陽菜^{ながおかひな}。今顔に似合わない名前だなとか思った奴、ちよつとこつち来てみようか。高2だが学校に行くことはめったにない。学校も私のことは諦めているようで何も言つてはこない。親も同じだ。私がどこで何しようとも関係ないといった感じた。そもそも私があいつらと一緒にこんな風になった原因は親にある。

どこにでもある話した、親が原因でくれるなんて。最初は本当に小さなことが始まりだった。子どものころから口より先に手が出るような性格だったが決してこちらから手を出すという事はしなかった。でもある日、友達の女子がある男子にいじめられているのを見かけた私はその男子と喧嘩し二人とも傷を負った。その夜その男子が父親を連れて私の家に来た。男子の父親は自分の子どもが私のせいで怪我をしたので謝れそう言ってきた。もちろん私は、父に私に非はない、あの男子が友達をいじめていたのが悪いと言った。

しかし、父は私の言ったことを信じてはくれず、私を殴った。嘘をつくな、お前が悪いんだろ、謝りなさい。父はそう言つて私に無理やり頭を下げさせた。男子はざまあ見ろといったふうに笑っている。悔しかった…

あんな奴に頭を下げることが。

悲しかった…

親に信じてもらえなかったことが。

それからだ、私が親を信じられなくなった。ことあるごとに親に反発し、手も出したこともある。そんな時だった、こいつらと出会ったのは。二人も私と同じだった。

二人に名前は、ショートあがのこころの茶髪が刈羽かじわのあ乃愛、ポニーテールの赤髪が阿賀野心。顔と名前が一致しないところも同じだ。私たちは目つきが鋭くて、いつも眉間にしわを寄せたような顔をしている。子どもなんか私たちの顔を見ただけで泣き出しそうだ。私たちがバイクで走っていると前の方をバイクの集団を走っている。振り返ると後ろにもバイクの集団が走っていた。どれも、改造されたバイクだ。普通のツーリングではなさそうだ。どうやら私たちをどこかへ連れて行くつもりらしい。

「どうする？ 陽菜？」

隣を走っていた乃愛が聞いてくる。あたりを見回してみるのが、抜け出すことは難しそうだ。

「ついて行ってやるさ」

私たちはその集団について行つた。

連れて来られたのは郊外の廃工場、周りに民家はなく人もいない。

そこには一人の男がいた。見覚えのある顔だ。太田拓真おおたたくま、結構有名な不良グループのリーダーである。

「待ってたよお、陽菜ちゃん」

太田は小馬鹿にした感じで言つた。

「てめえに下の名前で呼ばれる筋合いはないね」

下の名前で呼ばれるのは嫌いだ。乃愛と心以外は決して下の名前で呼ばせない。

「つれないねえ知らない仲でもないのに」

「こんな話するために呼んだんじゃないだろ？」

「まあまあゆっくりしてればいいじゃん」

「こつちも暇じゃないんだよ。さっさとしろ」

太田は前々から気に食わなかった。この前もこいつの仲間の何人かとやりあった。私たちは無傷だったが、相手はみんなボロボロだった。

た。

「しょうがない」

太田がそう言っていると、そろそろと男たちが出てきて私たちを取り囲んだ。

「お前たちはちょっと頑張りすぎちゃったんだ。俺が声かけたらこんなに集まったよ」

なるほど、日ごろの恨みを晴らそうってわけか。

「ふん、そろそろそろそろ。女3人に相手にするのがそんなに怖いのかい」

私がそう言つと、

「かつこ悪う」

「それでも男か？」

乃愛と心が続けてそう言う。わかっているこれは強がりだ。いくら私たちでもこの人数相手にして勝てるわけがない。二人もわかっているだろう。

「行くよ。乃愛、心」

「うん」

「ああ」

私たちは男たちに向かって行つた。

「おら、さっきまでの元気はどうしたよ。え？陽菜ちゃん？」
「ぐう……」

結果は思っていた通りになった。最初こそ私たちが優勢だったが、時間がたつにつれ、相手の方に流れが傾いていった。乃愛と心の方も力尽きて一方的にやられている。

「もう殴るのも飽きてきたし、そろそろ……」

太田はいやらしい笑み浮かべている。何をするかはこの顔を見れば

だいたいわかる。太田が私の服に手をかけようとした時、

「おついたいた。いやゝバイク追っかけるのはやっぱつらいわ」

場違いなのんびりとした声が聞こえた。声のした方を向くと、さっき私たちに財布を返してくれと言ってきた少年がいた。

「あいつは…」

「なんだてめえは？」

太田も気付き少年に言った。

「通りすがりの財布を返してもらいに來た高校生です」

「財布だと？」

「お取り込み中すみませんがこれあげるんで黙っててください」

そう言いながら懐から黒いボールのようなものを取り出し。太田に投げる。ボールは太田の足元に落ちた。よく見るとそれは…

手榴弾だった。

チユドオオオオン！

「ぎゃああ！」

吹き飛ぶ太田。

「みなさんにもあげますよ」

あいつは手榴弾をいたるところに投げる。工場一体で爆発が起こり、男たちの悲鳴があたりに広がる。1分もしないうちに、男たちは全滅した。あたりは爆撃を受けた後のようだった。一人も死んではいない。少年は爆発の後を見つめ、何かを見つけたようだ。

「やったー！当たりが出た！駄菓子屋でもう1個手榴弾がもらえる！！」

なにその手榴弾10円ガム見たいな扱いされてんの？今の駄菓子屋って手榴弾も売ってんの？

私が心の中でつつこみを入れていると、

「大丈夫ですか？」

少年が私に声をかけ、手を差し伸べてきた。

「なんで私たち私たちを助けた」

私は手を取らずに聞いた。

「あえて言うなら俺の性分かな。男が寄ってたかって女に手を挙げるのが許せないんですよ。迷惑だったら謝ります。まあほついたら財布が返してもらえないと思ったのもあるんですけどね」

「迷惑だよ。誰も助けてくれなんて言っていないだろ」

私の言葉に乃愛と心が頷く。私たちのプライドが助けてもらうことを良しとしないのだ。

「失礼しました」

頭を下げて私たちに謝る。

「失礼ついでにもう一つ」

頭をあげて少年が言う。

「どんな理由でこういう事をするようになったかはわかりませんが、あなたたちはそんなに綺麗なんだから喧嘩なんかして傷つくのはもったいないと思います」

少年の顔はとても真剣な顔だった。私たちを見下して言ってるわけではないのは顔を見ればわかる。私たちは何も言う事ができなかった。

「じゃ、俺は帰ります」

そう言って少年は歩いて行く。

「ま、待て！」

私は少年を呼び止めた。

「お前名前は？」

なぜかはわからない。でも私は少年にそう聞いた。

「俺は三条遊馬、なんでも屋です」

少年は微笑みながらそう言った。その頬笑みに私は見惚れてしまった。

次の日の学校…

「遊馬！俺の財布は！？」

俺の姿を見ると兼一が駆け寄ってきた。

「あつ忘れてた」

「忘れたってどういうことだ！？」

「昨日はいろいろあつたんだよ」

すっかり忘れていた。途中まではちゃんと憶えていたんだけどな。最後の最後で忘れちゃった。

「今日あたりまた行くから」

俺が兼一に言うところクラスの男子が俺に声をかけてきた。

「三条！なんかおっかない姉ちゃんたちが三条遊馬を出せて校門のところに来てるぞ！」

「おっかない姉ちゃん？」

こころあたりがすぐ最近にあつた。

「兼一、財布すぐに帰ってくると思うぞ」
「？」

「よくここがわかりましたね」

俺が校門に行くと、やはり昨日の3人がいた。ところどころに包帯が巻かれている。

「今日はどうしたんですか？」

「あ、あの！」

ロングの子が口を開く。

「昨日はありがとうございました！」

3人は頭を下げる。

「え、いや、でも迷惑だったって…」

良いなりお礼を言われて戸惑う俺。

「あれは…その…、照れ隠しって言うか…強がりって言うか…。とにかくすみませんでした！ 私たちあの後話し合って今日お礼を言おうって、もう喧嘩はしないようにしようって決めたんです」

「そうだったんですか」

彼女たちが喧嘩をしないと決めてくれたことは嬉しい。

「それと、今日はお願いがあつて来ました」

「お願い？」

「私たち3人になんでも屋の手伝いをさせてください！」

「「お願いします！」」

と、お願いされてしまった。どうしょ。

「うーん」

腕を組んで考える。3人の方を見るとなんか目が少しうるんでるような気がする。もとの顔が綺麗だから破壊力は絶大だ。

やめて！ そんな目で俺を見ないで！ 断れなくなっちゃうから！

そんな俺の心の声を通じるわけもなく、3人は俺を見てくる。

「わかりました、お願いします…」

俺のバカ…

「「「はい！」」」

3人はとても喜んでいる。この顔を見ると自分の決断も良かったたんじゃないかと思える。

「そつえば、まだ名前聞いてませんでしたね」

ふと思ひ出した。

「私は長岡陽菜です」

「刈羽乃愛です」

「私は阿賀野心」

「よろしく願います。長岡さん、刈羽さん、阿賀野さん」

「三条さん、私たちは下の名前で呼んでください。呼び捨てでいいです。それと敬語もいりません」

俺の言葉に長岡さんがそう返す。

「えっ」

「お願いします」

また例の目で俺を見る。もう俺は断れない。

「わかった。俺も遊馬でいい」

「遊馬さん、これからよろしくお願いします！」

「「よろしくお願いします！」」

こうして陽菜、乃愛、心の3人は俺の手伝いをするようになった。桜になんて言えはいいんだろ。

「あの遊馬さん、遊馬さんが言ってた財布のことなんですけど……」
「ん？」

「てめえどういうことだ？あの財布には600円しか入ってなかったそうじゃないか？」

俺は兼一に言う。兼一はボロボロで、顔ももう誰だかわからないくらい腫れている。俺がやった。

「すみばせん…でば、あでがぜんざいざんなんです…」
顔が腫れているせいで話しづらそうだ。

「600円が全財産？てめえはこの小学生だああああ！！」

「ぎやああああ！！」

これから先は自主規制です。この様子を見ていた人はショックが大きすぎてしばらく眠れなくなっただけらしい。兼一病院に送られしばかりの間学校に来ることはなかった。

この事件は「600円の財布の惨劇」として語り継がれることになった…。

第9話後篇（後書き）

前編と後編のバランス間違えました…。もっと計画的になりたいです。コメントお待ちしております。

主要登場人物（前書き）

こちら辺で軽い人物紹介をしようと思います。

主要登場人物

三条遊馬

年齢：16歳

趣味：昼寝

特技：忍刀、手裏剣、手榴弾などによる戦闘や隠密活動

好きなもの：布団

嫌いなもの：危ないこと、弱い者いじめ、金欠

天星高校1年、学内での成績は中の下。容姿はかつこ良くもなく悪くもなくといった感じ。御存じの通りなんでも屋を営んでいる。仕事はお使いから護衛まで何でもこなす。両親はすでに他界しているが、その死因はまだ誰にも語られていない。基本めんどくさがりだがやる時はやる。恥ずかしいセリフをポロつと言ってしまうことが多々ある。忍者の技術をどこで学んだかは不明であるが、その家系に秘密があるらしい。手榴弾を使う事を好むため出費が多い。

御巫桜

年齢：16歳

趣味：読書

特技：書道、情報収集

好きなもの：遊馬

嫌いなもの：御巫家、遊馬に好意をもつ女

才色兼備、文武両道。大和撫子という言葉がよく似合う。御巫家の次女であるが本妻の子ではなく妾の子。そのため昔から家ではつらい思いをしてきた。しかし、遊馬と出会い生きる希望を見出すことができ、現在はなんでも屋の手伝いをしている。

遊馬にとってはなくてはならない存在。遊馬に好意を持っており、ほかの遊馬に好意を持つ人間に対して敵意を表す。なんでも屋の手伝いをするため遊馬から多少の戦闘訓練を受けている。その能力は

一般人寄りには優れているが本職を相手にするにはまだまだといったところ。

ユリア・バルバートル

年齢：16歳

趣味：読書、音楽鑑賞

特技：4ヶ国語を話すことができる、家事全般

好きなもの：料理を作ること、遊馬

嫌いなもの：虫全般

金髪碧眼。美少女の部類に入る容姿。学力も上の中といったところ。父親の仕事の都合でいろんな国に行くことが多い。家族構成は父親と二人。母親は昔事件に巻き込まれて死亡している。そのため家事全般が得意。和食も得意らしい。現在は学校の寮に住んでいる。遊馬に好意があるようだが桜がいるためその気持ちは封印している。今後その気持ちがどうなるかは不明。

遠見兼一

年齢：16歳

趣味：カラオケ

特技：特になし

好きなもの：魚料理

嫌いなもの：怒った遊馬

遊馬の幼馴染で幼・小・中・高と同じ学校。家族を失って悲しんでいた遊馬を立ち直らせた。

しかし今はだいぶ遊馬にひどい扱いをされている。成績は遊馬より少し上といったところ。遊馬がなんでも屋をしていることは知らないが、いろいろと遊馬に頼むことがある。現在彼女募集中。

長岡陽菜

年齢：17歳

趣味：ツーリング

特技：喧嘩

好きなもの：バイク、ぬいぐるみなどのかわいいもの
嫌いなもの：口だけのやつ

町では名の知れた不良少女。金色の長髪。3人組の中でリーダー的な位置にいる。毎日のように他の不良と喧嘩していたが遊馬に出会い更生。現在はなんでも屋の手伝いをしている。いつも眉間にしわを寄せ鋭い目つきだが、もとの顔は良い。遊馬より年上だが遊馬と話すときは敬語を使う。天星高校の近くの高校に通っていて、今はちゃんと授業に出席しているらしい。実はかわいいモノ好きで部屋にはぬいぐるみが数多く置かれていたとか。遊馬には好意というより尊敬の念を抱いている。

刈羽乃愛

年齢：17歳

趣味：スポーツ観戦

特技：スポーツ全般

好きなもの：スポーツ

嫌いなもの：勉強、親

陽菜と同じ学校に通っている。茶髪のショートヘア。3人の中のムードメーカー。スポーツが好きであり、野球やサッカーは球場やスタジアムに見に行ったりする。また、実際にするのも得意でありその気になればどの運動部でもトップクラスの実力を発揮することができるという。ただ、勉強は不得手で出席日数以上に成績の方が進級のための大きな課題になっている。

阿賀野心

年齢：17歳

趣味：猫と戯れること

特技：英会話

好きなもの：猫、子ども

嫌いなもの：ゴキブリ、犬

髪を赤く染めてポニーテールにしている。口数は少ないが暗いというわけではない。陽菜と乃愛と同じ高校に通っていて、3人の中で一番学力が高い。本気を出せば学年1位も夢じゃないとか。特に英語が得意で、その英会話能力は英語の教師も驚くほどである。猫が好きで、猫を見ると思わず性格が変わってしまうらしい。子どもの相手をするのが好きで昔の夢は保育士だった。ただ犬が苦手で見ただけで固まってしまう。

第10話前篇

「ん、よく寝た」

俺は布団から半身を起こす。ここは俺の家、5畳一間の古いアパートだ。家賃が安いし住んでみるとなかなか居心地がいい。今日は学校も仕事も休みなので家でゆっくり昼寝をしていた。

ピンポン

俺が布団を片づけているとチャイムが鳴った。

「はい」

俺がドアを開けるとそこには誰もいなかった。と思ったが視線を少し下げると、そこには歩美ちゃんと歩美ちゃんと同じくらいの年の男の子が一人いた。男の子の方は初めて見る顔だ。

「こんにちは、歩美ちゃん。その子友達？」

「うん、同じクラスの氏川匠君だよ」

「は、はじめまして」

歩美ちゃんの後に続いて匠君は少し緊張気味に言う。

「はじめまして匠君。俺は三条遊馬。匠君は歩美ちゃんの彼氏かなかな？」

からかうように匠君に言う。

「そ、そんなじゃないです！」

顔を真っ赤にしてそう答える匠君。これこそ俺が求めていたリアクションだ。

「違うよ。だって歩美はお兄ちゃん一筋だもん」

歩美ちゃん、ちょっとそのリアクションはお兄ちゃん求めてない。

それに匠君、なんか落ち込んでるし。

「はは…それで、今日はどうしたの？」

ひきつった笑みを浮かべながら歩美ちゃんに聞く。

「お願いお兄ちゃん、匠君のお父さんとお母さん探してあげて！」
どうやら俺の安らかな休日は終わりを迎えたらしい。

玄関で話していいような内容ではなさそうだったので、俺は二人を家の中に入れた。ちゃぶ台を囲んで俺たちは座っている。

匠君の話をまとめるとこういうことらしい。3日前、会社に出勤した両親が今朝になっても帰って来ないとのことだ。両親から連絡はなく、会社に問い合わせみるとその日は出勤していないという。今匠君は祖父母の家に世話になっている。警察にも知らせてあるとのこただが、まだ何も情報がないようだ。

「なるほど。匠君お父さんたち出かける時も何も言っていなかったんだよね？」

確認するように匠君に聞く。

「うん」

匠君が頷く。

「変わった様子とかは？」

「わからないけど、いつも通りだったと思う」

「そっか」

困った全然わからない。もともとこういうこと得意じゃないんだよね。

俺が悩んでる様子を見て歩美ちゃんが、

「お兄ちゃん、お兄ちゃんなら匠君のお父さんたち見つけれられるよね？」

俺に期待と不安を込めた目をしながら言うってくる。この時点で俺に「ごめん、出来ないや」なんて言う選択肢は消えてしまった。

「大丈夫だよ、歩美ちゃん。俺に任せて」

歩美ちゃんの頭に手を置きながら言う。

「うん！そっだ匠君」

歩美ちゃんの言葉に頷き、持っていたカバンのを手取る匠君。歩

美ちゃんも同じようにカバンから何か取り出そうとしている。

「あのこれ」

匠君が取り出したのは貯金箱だった。

「これは？」

俺が聞くと、

「依頼料だよ」

歩美ちゃんが手に貯金箱を持ちながら答えた。

「お兄ちゃんなんでも屋さんでしょ？だから歩美のお父さんたちもお兄ちゃんに何か頼む時はお金渡してたんだよね？」

なるほど、そういうことか。確かに歩美ちゃんの両親から依頼料を受け取ったことは何度かある。歩美ちゃんはそれを見ていたんだろ
う。

「お願いします！」

貯金箱を俺に挿しだしながら匠君は頭を下げる。

「歩美からもお願いお兄ちゃん！」

歩美ちゃんも貯金箱を俺に挿しだす。

俺はしばらく二人を見つめ、そして、

「確かにこの依頼引き受けました」

そう言つて貯金箱を受け取る。

「ありがとうございます！」

「ありがとう、お兄ちゃん！」

二人も顔が一気に笑顔に変わる。この笑顔を裏切るわけにはいけない。
い。

受け取った貯金箱二つの小さな貯金箱、それはとても重く感じられた。
た。

俺は早速桜に連絡を取った。

『はい、何か御用ですか？』

「少し調べてほしいことがあるんだ」

俺はことのいきさつを桜に話し、匠君の両親についての情報を集めてもらうように頼んだ。

『わかりました、後ほどこちらからご連絡します』

「頼む」

俺は携帯を切り、隣にいた匠君に声をかける。

「じゃあ匠君今から君の家に行ってもいいかな？」

「僕の家？」

匠君が聞き返してくる。

「うん、何か手掛かりがあるかもしれないからね」

「わかった」

「歩美ちゃんは家に帰りな、俺についてくると帰り遅くなっちゃうかもしれないし」

「えー、歩美も行きたい」

歩美ちゃんは頬を膨らませながら言う。

「お願い」

俺は手を合わせて言う。

「わかった…またねお兄ちゃん、匠君」

「気をつけて帰るんだよ」

「またね、歩美ちゃん」

歩美ちゃんを見送り、俺は匠君の案内で匠君の家に向かった。

「通帳も印鑑あるか…」

匠君の家を一通り調べ終わってつぶやく。考えたくなかったが遺書の類も一応探してみたが見つからなかった。ひとまずは安心した。どうやら何か目的があって氏川夫妻はいなくなっただけではないらしい。俺がいろいろ思考を巡らせていると、俺の携帯が鳴った。液晶画面を見ると桜だった。

「もしもし」

『遊馬さん、頼まれていたこと大方調べ終わりました』

「聞かせてくれ」

『はい』

俺の言葉を聞いて桜が話し始める。話を聞くと氏川夫妻には何か大変な問題があった様子はない。どこかに借金があったわけでもなく、対人関係にも問題はない。勤め先は方山製薬^{かたやま}の経理部。職場でも問題は無いとのことだ。

「片山製薬っていや、製薬会社の大手だな。やはり金銭的な問題はないみたいだ。二人の行方は？」

『すみません、わかりませんでした』

桜にもわからないか…、こりや時間がかかりそうだな。

「わかった、引き続き頼むわ。俺の方でも調べるから」

『はい。あつ遊馬さん、一つ気になることが』

「ん？」

『片山製薬には裏金や脱税などの噂があるようです』

「裏金に脱税か…」

今回のこととは関係ないかな。いやちよつと待てよ。

「桜、氏川さんたちは経理に勤めてたんだよな？」

『はい』

「どうやら、片山製薬をあたってみる必要がありそうだな」

『そのようです』

さすがは桜もうとづくにわかっていたようだ。

「わかったこの件も含めて調べてくれ」

『了解しました』

第10話後篇（前書き）

やっと更新できました…。この小説をお気に入りに登録してくれて
いる方々にとっても感謝しています。

第10話後篇

匠君と別れ今度は勤め先の片山製薬に向かう事にした。とりあえず俺は情報を集めそこから氏川夫妻を探そうと思っている。しかし、俺と桜の二人だけではきついところがある。なので俺は陽菜、乃愛、心の三人にも協力を求め、町で聞き込みをしてもらっている。しばらくすれば連絡が入るはずだ。

片山製薬は街の中心部にほど近いビル街の一角にあった。さすがは大手の製薬会社ということもあって片山製薬のビルはビル街の中でも大きい部類に入る。なかなかこういう建物に入るのは緊張するものだ。そんなことも言ってられないので俺はビルの中に入った。

ビルの中はまあすごかった。なんかこう仕事のできる大人しかいませんよ、みたいな雰囲気が出まくってる。俺完全に浮いてるよ。「頑張れ」と自分に言い聞かせて俺は受付まで歩いて行き、受付の女性に話しかける。

「すみません」

「はい、どうなさいました」

女性は不思議そうに俺に聞く。俺のような子供がここを訪れたことがないのだろう。

「経理の氏川和彦かずひこさんに会いたいですけど」

匠君に教えてもらったお父さんの名前を使う。

「少々お待ちください」

案外すんなりと話を通った。大きな会社はチェックが厳しいと思っていたんだけどな。

「すみません、氏川は今日出社していないようです」

期待してはいなかったが、やはりいなかったか。

「そうですか…。お休みの理由はわかりますか？」

「さあ…そこまでは。無断欠勤のようなので」

「わかりました」

女性にお礼を言って帰ろうとすると、

「君もしかして氏川さんの知り合い？」

一人の若い男性に声をかけられた。

「はい、そうですけど」

「僕は氏川さんの部下の前原。君の名前は？」

「三条遊馬と言います」

「じゃあ遊馬君と呼ばせてもらうよ。遊馬君これからちょっといいかな？」

「はあ……」

俺は前原さんに社内の休憩所に案内された。

「君も氏川さんたちを探しているのかい？」

手近なテーブルに座って、前原さんが俺に聞いてくる。

「『君も』と言うと前原さんも？」

「ああ、無断で会社を休むような人たちじゃないしね。無断欠勤がこんなに長く続けば何かあったんじゃないかと思うのが普通さ」

「やっぱりこちらにも何も報せがないんですか？」

「あの二人が会社に来なくなってから一度もね」

ため息をつきながら前原さんが答える。

「なにか二人に変わった様子とかありました？」

「いや、そんな様子はなかったと思うが……」

前原さんは何か気になることがありそうだ。

「何か気になることも？」

俺がそう聞くと少し言いづらそうな顔しながら、

「僕が調べたことなんだが、うちの会社には裏金があつてそのことに氏川さんたちが関わっていたみたいなんだ。うちの部長ともそのことで揉めていた」

やはりそうだったか……

「前原さん、ここでそういう話はしない方がいいんじゃないですか？」

「いや君には話したほうが良い気がしたんだ。大丈夫誰も聞いてはいないさ」

確かにこの休憩室には俺たち二人以外には誰もいない。しかし妙にあたる俺の嫌な予感が湧き上がってくるのを感じた……。

「前原さん、今日はありがとうございました」

「いや、何かわかったら連絡するよ」

「お願いします」

俺は前原さんに別れを告げ、片山製薬を後にした。

「どうして俺の嫌な予感つてのはこうも当たるもんかね？」

今俺は小刀や拳銃をもった怖いお兄さん達に囲まれている。人数は3人。人通りの少ない道に出た途端これだよ。

「悪いが消えてもらうぜ坊主」

お兄さんの一人が言うと、小刀を持った人が突っ込んできた。俺はそれを交わし鳩尾に蹴りを入れる。突っ込んできた人は小さなうめき声をあげて倒れる。すかさずクナイを投げて拳銃をはじき手刀を入れて気絶させる。

「なっ?!」

最後の一人が驚いという間にクナイを喉元に突き付ける。

「すみませんね、童貞卒業する前に死にたくないんですよ」
につこりと笑いながらお兄さんに言う。

「さあ、教えてもらいましょか。誰があなたたちに指示したんです？もつともだいたい予想はつきますが」

お兄さんがしゃべりだすまで時間はかからなかった。

社長室の中には男が二人いる。初老の男と若い男だ。

「始末はついたのか？」

初老の男が若い男に話しかける。

「御心配なく、うちのもんがもう手を打っていますよ。それより金の方はよろしく頼みますよ、社長」

「わかっている。まったくどこかのバカのせいでいらぬ手間をかけたしまった、まさか裏金の情報を漏らしてしまうなどは…。經理の奴にもそれ相応の処分を与えねばならんな」

そう言つて視線を窓の外に移す。

「あの情報を外部に漏らすわけにはいかない」

「そのために氏川夫妻を殺害したんですか？片山社長？」

「誰だ！？」

社長が叫ぶと、ドアの向こうから一人の少年が現れた。

「お前は今日会社に来ていた！？どうしてここに！？」

「お兄さん方なら眠ってもらいました。あなた方がしたことすべて教えてくれましたよ」

ニツコリと笑いながら少年が言う。その顔は笑っているのに社長たちは冷や汗が止まらない。

「さあ、お仕置きの時間の始まりですよ」

「た、助けてくれ」

壁に寄りかかりながら社長は俺にそう言った。若い男は早々と俺が気絶させて床に転がっている。

「俺はね社長さん。あなたの会社に裏金があるうと別にかまわないんですよ」

そう言いながらクナイを投げる。クナイは社長の顔すれすれのところに刺さる。

「ひっ！」

「そのことを知った今も、これを誰かに教えようなんて考えてもいません」

また1本クナイを投げる。今度は脇の下に刺さる。

「ただね社長さん。あなたは匠君が、まだまだ子どものあの子が家族を失ったことを知った時どんな気持ちになるか考えましたか？」

1本また1本とクナイを投げながら社長に問う。

「突然、一人になってしまった時の悲しみがあなたにわかりますか？」

クナイを投げるのをやめる。

「あなたの命を奪おうとは思っていません」

俺は社長に笑いかける。

「助けてくれるのか」

「でも……」

笑顔を無表情に変えて、

「死よりも恐ろしい、恐怖を味わってもらいます」

「ひiiiiiiii！」

その後氏川さんたちの遺体は町の近くの山奥で発見された。

「匠君、本当にゴメン……お父さんたちを助けることができなかった……」

俺は頭を下げ匠君に謝る。今日は匠君の両親のお葬式が行われている。俺のほかに桜、陽菜、乃愛、心も制服姿で来ている。俺だけでいいと言ったが一緒に来てくれた。彼女たちも一緒に頭を下げてくれている。

「警察の人から聞いたよ。お父さんたちは僕がお兄ちゃんにお願いした時にはもう死んじゃってたって…」

おそらく知り合いの後藤警部だろう。俺が聞きだした遺体の遺棄した場所も後藤警部を経由して警察に教えた。

「それに…」

匠君は目に涙を溜めながら続ける。

「お兄ちゃんはもちろんとお父さんたちを見つけてくれた…、お兄ちゃん僕のお願いちゃんとか覚えてくれたんだよ？」

「匠君…」

俺も目からも涙がこぼれてくる。

「ありがとう、お兄ちゃん」

涙を流しながら匠君は笑顔を作る。しかしこらえられなくなって声を出して泣き出した。俺は匠君を抱きしめ一緒に泣いた。

第11話前篇

季節は夏。強い日差しが容赦なく照りつけてくる。どこの高校も夏休みに入っており俺の高校も例外ではない。しかし、これといって何か予定があるわけではないので、することといえば仕事ぐらいなものだ。夏休みの課題みたいなものも出されたが夏休みに入る前にあらかた終わらせてしまった。うちの担任はこういったことにはえらく厳しい。宿題などの提出を忘れると、思い出すだけでも恐ろしい。まあそんなわけで無駄に夏休みを消化している俺であった。今日も家でダラダラしていると、俺の携帯が鳴った。液晶画面を見るとユリアからだった。

「もしもし」

『もしもし、元気にしてる遊馬?』

「それなりに元気だぞ」

『そう、なら良かったわ。とこれで明日暇?』

「明日? たぶん暇だ。今のところ仕事も入ってないし」

あまりうれしいことではないけどな。

『だったら、明日一緒に出かけない?』

「なんだ? デートのお誘いか?」

『ふふつ、まあそんなところよ。で、私のお誘いお受けしていただけるかしら?』

「喜んで、お供させていただきますよ」

『じゃあ、明日10時に駅で待ち合わせしましょ』

「了解」

こうして俺はユリアと出かけることになった。

俺は約束の時間の10分前に駅前に着いた。駅前は人が多くユリアを探すのに少し手間取った。やっとユリアを見つけたがその隣には

もう一人女の子がいた。よく見るとそれは桜だった。俺が近寄ると二人は俺に気がついた。

「おはよう……」

「おはようございます、遊馬さん」

あきらかにユリアのテンションが低い。なにかあったのか？

「おはよう、ユリア、桜。桜はどうしてここに？」

「ユリアさんに誘っていただいたんです」

「そ、そうよ、私が誘ったの。やっぱり人数が多い方が楽しいと思
って」

桜は笑顔でこたえるが、ユリアの顔は真つ青だ。

「大丈夫かユリア？具合でも悪いのか？」

「そ、そんなことないわよ。さっ早く行きましょう！」
「？」

遊馬は知るよしもなかった。遊馬が来る前に、

「こんにちは、ユリアさん」

「桜なんでここに！？」

「私をたぶらかそうなんて考えない方がよろしいですよ」

「は、はい。申し訳ありませんでした！」

なんてやり取りがあつたことを。

駅前を出た俺たちはまず映画館に行くことにした。なんでも携帯小説をもとにした恋愛映画が放映中らしく、ユリアはそれが見たいとのことだ。恋愛ものというのはあまり好きではないのだが、桜も見たいと言ったのでしぶしぶ従うことにした。
しぶしぶ見ることにしたものの、映画はなかなか感動的であった。恋愛ものが苦手な俺でもウルツときてしまうほどだ。ユリアと桜は本当に涙を流していたが。時刻はもう正午を過ぎており、俺たちは近くの店で昼食をとることにした。俺たちが入ったのは商店街にある落ち着いた雰囲気洋食屋で、値段の割に量があり味も良かった。

「これからどうするんだ？」

俺がユリアに聞く。

「そうねえ……」

ユリアが考えていると……

「きゃあああああ！」

「逃げろお！」

店の外から悲鳴が聞こえた。

「なに！？」

ユリアの言葉を聞く前に俺は店の外に出た。すると、一組の男女が商店街の道の真ん中で対峙していた。男の方は長身長髪、黒い髪に黒いスーツという黒づくめ。女の方は黒いショートカット、制服の上に革のジャンパーという少し変わった格好。背丈的に高校生だろうか。これだけでは誰も悲鳴をあげないだろう。問題は女の手にしている物にある。彼女は両手に銃を持っていた。俺が状況を理解し終わると同時に彼女は男に向かって引き金を引いた。間違いなく急所を狙っていたが、男はそれを難なくかわす。女はそれに構うことなく引き金を引き続ける。しかし、彼女の放った弾丸は男に当たることはなかった。

「あの男、強い」

こういう事にはあまり関わらない方がいいんだけどな。俺がそんなことを考えていると女の両肩から血が飛んだ。男が撃った、それはわかる。しかしいつ銃を抜いたのかがわからない。

「今はそんなこと気にしてる場合じゃないか」

俺は行動を起こした。

「くっ」

相手がただ者じゃないことはわかっていたけどここまでとは。両肩

を打ちなかれ銃を握ることができない。

「ダメじゃないかこんな人の多いところで銃なんて使ったら。危ないだろ？」

男が私に向かって言う。

「うるさい！人殺しのお前が何を言う！」

「人に銃を向けておいてその言い方はないだろう。君も似たようなものじゃないか」

男はゆっくりと銃を向ける。

「俺はなるべく仕事の時以外殺しはしないようにしているけど、銃を向けられて少しイラツときちゃったんだよね」

ここまでか…そう思った時。突然男が後ろに跳んだ。男のいたところに手裏剣が刺さっている。コンクリートの道路にブツサリと。私が驚いていると店の屋根の上から人が飛び降りてきた。般若の面をつけた男、私と同じ年くらいの少年だと思う。

「何のつもりだ？」

男が少年に言う。

「嫁入り前の女性の体に傷をつけるなど言語道断、私が成敗してくれよう」

そう言って少年は背中から刀を二本取り出し両手に構える。よくあんなものを背中に隠し持っていたものだ。

「それ、銃刀法違反だよ」

「貴様に言われる筋合いはない」

少年は男に斬りかかる。その動きは一瞬で素人には消えたように見えただろう。男の服が切れる。これを見て男は驚いている。

「ほう、俺に触れるとは」

「！」

少年が後ろに飛ぶと地面に弾丸が当たる。まただ、私には男が撃った瞬間がわからなかった。

「すごいな。俺の銃をかわす人間なんてめったにいないのに」

少年はひるまずにまた男との距離を詰める。今度は一撃ではなく両

手の刀を連続してはなつ。男はそれをかわしながらも銃を撃つ。少年もそれをかわす。瞬きもすることを許さない攻防が繰り広げられる。

「ぐっ」

少年の刀を腹に受け男がぐもった声を出す。峰打ちらしいが相当効いている。少年は追い打ちをかけるが男はそれをかわす。

「お前とやり合うのは部が悪いな」

そう言つて男は何かを投げる。煙幕だ。あたり一面は煙で覆われる。煙が消える頃には男の姿はなく、私は氣を失ってしまった。

「逃げられたか。こっちも危なかったな」

銃弾をかわすのは容易ではなく、1、2発かすつて血がにじんでいる。

「今はあいつを追うよりもこの子の方を何とかしなきゃ」

血を流しすぎたのだろう、氣を失つて倒れている。俺は桜の方に顔を向ける。彼女もわかったようでユリアを連れてこの場から去る。

俺も彼女を担いでこの場を後にした。

第11話前篇（後書き）

どんどん女性キャラが増えていく気がする…。このままでいいのでしょうか？

第11話後篇

「遊馬、終わったぞ」

「ありがとうございます先生」

「なに、金さえもらえればなんでもするさ」

「ここは佐渡医院さわたりにという昔からお世話のなっている診療所だ。銃で撃たれた少女を普通の病院に連れていくわけにもいかずここに連れて来たのだ。俺もたまに仕事中に斬られたり撃たれたりした時にここで治療してもらっていて、ここの院長の佐渡大和やまと院長は信頼できる。佐渡先生は白い髪に白いひげ、サンタの格好がよく似合いそうだ。もともと、性格的にサンタはできなさそうだが。」「今は麻酔を打って眠っているが、もう少ししたら目を覚ますだろう」

「そう言って先生はベンチに座る。」

「あの女の子、お前の同業者か？」

「さあ、でも履歴書には書けない仕事でしょうね」

「俺は先生の隣に座って答える。」

「そのうち騒ぎになるぞ、『昼夜の商店街で銃撃戦！』、『女子高生が銃発砲！？』とかってな」

「『謎の般若の正体は！？』とかはないですかね」

「俺らがそんな話をしていると、桜とユリアが入り口から入ってきた。」「あつ本当にいた。すごいわね桜。連絡もとつてないのに遊馬の居場所がわかったなんて」

「ユリアが俺を見て言う。」

「たまたまですよ。なんとなく遊馬さんがここに居る気がしたんです」

「桜が微笑みながら答える。」

「久しぶり桜ちゃん。遊馬が銃で撃たれた時以来か」

「お久しぶりです佐渡先生」

桜と先生が挨拶をかわす。

「遊馬あなたも銃で撃たれたことあったの？」

「ああ、そんなことあったな。あの頃は若かった」

遠い眼をして言う。あの時は本当に死ぬかと思った。

「まあそれ以来危ない仕事を引き受けないようにしてたんだ」

「だからお使いなんかするようになったのね」

「お使いも立派な仕事だよ」

俺とユリアが話していると病室からあの女の子が出てきた。

「おいおいまだ動いちゃダメだよ」

佐渡先生が注意する。その声はあまり心配しているようには思えないが。

「大丈夫だ、こんな傷大したことはない」

麻酔がまだ切れていないのか少しふらついている。佐渡先生は彼女の肩をつかむ。

「ぐっ！」

「医者言う事を聞くのが患者の役目だよ」

「う、うるさい！」

「まったく、困った患者だ」

ふうとため息をつきながら白衣のポケットから注射器を取り出し、すばやく少女に薬剤を注入する。まさに目にもとまらぬ速さ。間違はなくこの人は凄腕の殺し屋になれる。

「な、なにを…する…」

女の子は意識を失って先生にもたれかかる。あの薬俺も何度かうたれたことがある。先生のオリジナルで許可や承認をうけていない代物らしい。あの人が医師免許を持っているのかどうかも怪しく思えてくる。

「大丈夫なの？あの人に任せて」

「俺が生きてるから大丈夫だろ」

俺が気を失った女の子を背負いベッドに運んでから30分ほどで彼女は目を覚ました。すぐにベッドから出ようとしますが先生が注射器を取り出すところを見てもとの位置に戻る。

「落ち着きなさいよ、あなた銃で撃たれてるんだから」

その様子を見てユリアが注意するが彼女はそれを聞こうとする様子はない。女の子は俺たちの顔を見渡す。すると俺のところで目線が止まる。

「さっきのお面の男はお前か？」

「そうだ、と言ったら？」

「頼む！私をあゝの男の弾を避けられるようにしてくれ！」

彼女は頭を下げて俺に言う。

「その前に君のことを教えてほしいな」

これ口説いてるわけじゃないからね。怖い顔しないでくれ桜。

「どうしてあゝいうことになったのか。あゝの男は何者なのか。そして君が何者なのか」

女の子は少し考えて、

「わかった、まず私のことから話そう。私の名前は本成寺結ほんじょうじゆい、三雲みくも

市の高校に通っている。高3だ」

「高3！？年上！？」

ユリアが驚く。顔には出さないが俺もびっくりしている。本成寺さんが来ている制服から高校生だという事はわかったがそれがなかったら中学生でも通りそうだ。ユリアのリアクションに不満そうな顔をしつつも本成寺さんは話を続ける。

「私は高校生をしながら護衛の仕事もしている。銃の使い方はいちから父に教えてもらった。これからの世の中は銃を撃てなきゃ生きていけないと」

そんな世の中絶対嫌だ。

「私は父の養子で母親はいない。本当の両親がどうなったのかはわからない。その父も5年前に死んだ。あゝの男に殺された」

本成寺さんの話を俺たちは黙って聞く。なんだか仕事も生い立ちも俺と似てるな。

「その日、父はある要人の警護の依頼を受けていた。父は私の知限り依頼に失敗したこともないし、怪我をすることもなかった。今回も何事もなく終わる、そう思っていた。しかし、父は帰って来なかった。あの男は要人の娘を人質にとり武器を奪い、わざと急所は狙わずに鬭り殺しにしたんだ！」

お父さんのことを思い出すのはつらいだろう、彼女は目に涙を溜めながら話す。

「私もその時そこにいた…。怖くて何もできなかった…。だから私は誓った強くなると、誰よりも強くなつて必ずあの男を倒すと！」
彼女は俺の目を見て声を上げる。彼女の目には強い決意がこめられている。

「だから頼む、いやお願いします！どうか私を強くしてください！」
再度俺に頭を下げる。周りのみんなも俺の方に目を向けている。

「期間は？」

俺は本成寺さんに聞く。

「一週間後、スクエア・ホテルで日米の会合がある。会合の内容はわからないがそこに出席する議員たちを狙っているらしい。確実なのはその時だと思う」

スクエア・ホテルと言えばこちら辺で1、2を争うホテルだ。そこでの会合となればそれなりに重要なものだろう。

「一週間か…」

本成寺さんが不安そうに俺を見る。自分でもわかっているのだろう。一週間であの男と渡り合えるレベルまで持つていくことが困難であることを。

「わかりました」

「本当ですか!？」

ぱつと笑顔になる本成寺さん。

「ええ、でも…」

「でも？」

「…死なないでくださいね」

ひどくまじめな顔で俺は言った。

「あの…いつたいどんなことを…」

本成寺さんが不安そうな顔で尋ねてくるが俺は聞こえてないふりをする。

「先生、彼女いつ退院できますか」

「退院自体は明日でもいいさ、ただ抜糸するまでは激しい運動は控えてほしいんだがそうもいかないんだろ？」

「そうですねあまり時間がありません。これ以上メニューを圧縮したら本当に死んじゃいますよ彼女」

「もしもし、聞こえてます？本人いる前で死ぬとか言わないでほしいんですけど」

また本成寺さんが話しかけてきたようだが気にしない。

「ふむ、ならばこれを使ってみよう。私が作った薬でな、これを使えば明日には体を動かしても大丈夫だろう。未許可だしどんな副作用で死ぬかもしれないけど大丈夫だろ」

「イヤ、全然大丈夫じゃないんですけど！」

先生の説明を聞いて本成寺さんが叫ぶ。

「使っちゃってください。どっちにしろこのままじゃ死ぬんだし。一思いにやっちゃってください」

「私の意志は！？患者の権利は！？」

「わかった。いやぁ試したくてうずうずしてたんだよ」

「じゃあ俺ら外出てますんでよろしくお願いします」

そう言つて桜とユリアをつれて病室を出る。

「えっいやちよつと待って！イヤアアアアア！」

「医学の進歩には多大な犠牲が必要なのだ。本成寺さん、あなたの

犠牲はきつと無駄にはならない」

「あなたそのうちあの人に撃ち殺されるかもよ」
俺の言葉にユリアが溜息をつきながら言った。

本成寺さんは次の日無事に退院できた。目の焦点が合ってなかったり、ブツブツと何か言っていたが気にしないでおいた。

第12話前篇（前書き）

感想や質問お待ちしております。

第12話前篇

本成寺さんが無事？退院し、俺が彼女を特訓するわけになったわけだが、短時間であの男と戦えるレベルに持つていくのは至難の業である。普通のメニューでちゃんたらやつてたら彼女は死ぬだろう。

というわけで、俺達は今時雨町を離れ、ある屋敷を訪れている。メンバーは俺、桜、ユリア、本成寺さんの4人。訪れた屋敷は立派な門と塀でかこまれた大きな蔵も見える。

「ここは？」

「桜もここに来るのは初めてだったな。ここは俺のじいちゃんの家だ」

俺は門を開け中に入る。じいちゃんの家は江戸時代の上級な武士の家、イメージとしてはそんな感じだ。庭が以上に広くサッカーくらい軽くできそうだ。それで裏にある山までじいちゃんの家土地だつてんだから驚きだ。金があるんだつたら生活費を送ってほしいもんだが、男なら生活費くらい自分で稼げと言われた。

後ろの3人が門くぐろうとした時、俺の第6感が働いた。

「全体止まれ！」

俺が声を上げると同時に多数の手裏剣が俺に向かって飛んできた。それをかわし飛んできた方を見ると両手に刀を構えた老人が飛びかかってきた。俺も刀を抜き迎え撃つ。二人の刀がぶつかり合い火花を散らす、後ろに飛んで手裏剣を投げる。二人の動きはまるで同じだった。俺はその理由を知っている。なぜなら相手は…

「久しぶりだの、遊馬」

「久しぶりに顔見せたつてのにこれはないんじゃないの？じいちゃん」

「ふおつふおつ、なに我が弟子の腕が落ちていないか試しただけじやよ」

そうこれが俺の祖父、三条晋作^{しんざく}、俺の父さんの父親だ。佐渡先生が

サントならうちのじいちゃんはさしづめ仙人といったところだ。頭の髪はないが髭が半端なく長い。中国の山奥に居そうだ。

「まったく、70過ぎてんだからあんまり無理しちゃダメだって」

「わしは生涯現役じゃて、大丈夫じゃよ」

この人が言つと冗談に聞こえない。100歳超えても盗んだバイクで走りだしそうだ。

「挨拶も済んだことだし、しばらく世話になるよ」

「ああ」

じいちゃんとの再会の挨拶を終え、俺がふりかえると固まった女子3人がいた。

「どうした、3人とも？」

「いつもこんな感じなの…あなたたち？」

「こんな感じだ」

ユリアの問いにあつさり答える。

「おかしいでしょ！？久しぶりの再会なんでしょ！？どこにあんな挨拶する家があるって言うの！？あるわけないじゃない！」

「おお、ユリアが反語表現を覚えてる。お父さんは嬉しいぞ」

「誰がお父さんよ！」

ユリアはツツコミキヤラとして定着したな。ナイスツツコミだ。

「ユリアのツツコミキヤラとしての成長を確認できた嬉しさはさておき、本成寺さん、早速特訓を開始します」

「はい、師匠！」

俺とじいちゃんのやり取りを見て刺激されたのかやる気まんまんといった表情をしている。

「師匠？」

「はい師匠です！私のことも結って呼んでください！」

「イヤ、一応そっちの方が年上なわけだし、結さんではダメですか？」

「師匠がそう言うならそれでいいです」
しぶしぶと言った感じた。

「それと、桜」

「はい、なんですか？」

「いい機会だから、桜と一緒に特訓を受けてくれ。そろそろもう一個上のレベルに上げようと思う」

桜には前からいろいろと教えていたがまだ実践に出すレベルではなかった。この特訓がうまくいけば桜も俺が相手にするような奴に襲われても大丈夫だろう。

「もう一個上のレベル…わかりました、やらせてください！」

「おっし、じゃあ行こうか」

「まずは基礎体力作り、どんなに技術が合っても体がついてこなければ意味がない。というわけでランニングだ」

「ランニングはいいんですがこれは？」

腰ついている物を指して桜が聞いてくる。腰に着いた物からはコードが伸びており、その先にはトラのおもちゃのような物がついている。結さんの腰にも同じものがついている。

「それはじいちゃんが作ったもので、『追っかけ君』だ」

「『追っかけ君』？」

「そのコードの先についている物は時間がたつにつれてコードを登ってくる。それが腰にまで来ると体にたぶん死ななくらいの電流が流れるというものだ。それをつけてこの家の敷地の周りを5周してもらおう」

「たぶん死なないって、死ぬかもしれないんですか!？」

「5周つて、1周でも結構ありますよ!？」

俺の説明を聞いて桜と結さんが叫ぶ。

「人間それくらい追い込まれないといけない時だってあるんだよ。はい、スタート!」

「ちょ、ちょっと待って!」

結さんの叫びもむなしく、追っかけ君は動き出した。

「ほれ、さっさと行かないと大変なことになるぞ」

「鬼い！遊馬さんの鬼い！」

「いやあああ！死にたくないいいい！」

叫びながら二人は走り出す。その目に涙が見えたのはたぶん気のせいだ。

「ほれ、二人とも休憩は終わりだ。次のメニューに行くぞ」

黒こげになっっている二人に声をかける。案の定二人は間に合わなかったのだ。

「ま、まだやるんですか…？」

「何言っただ、さっきまでの準備体操みたいなもんだよ？これからだよ、これから」

「…」

俺の言葉を聞いて愕然とする二人。なぜだろう、こういう表情を見ると楽しくなってくる。

「遊馬、あなたドSなんじゃない？」

俺の心を見透かしたようにユリアが言う。言われてみるとそうかもしれない。

俺たちはじいちゃんの家のある部屋の前にいる。

「はい、次の特訓はここでやるぞ」

「ここはなんですか？」

結さんが俺に聞いてくる。

「それは入ってからのお楽しみってことで」

「…命に関わるようなことはないですよ？」

今度は桜が聞いてくる。

「…」

「どうして何も言わないんですか!？」
桜が俺に叫ぶが俺は無視して、部屋の扉を開ける。中は真っ暗で何も見えない。

ガルルルルル…
キシヤアアア…

「あの…なんか聞こえるんですけど…」

青ざめた顔で結さんが言う。桜も同じ顔をしている。

「気のせいだろ」

「気のせいじゃないでしょ!?!この部屋本当に大丈夫なんですか!？」

「この部屋に30分入っている、それが今度の特訓だ」

「無視しないでください!」

二人の抗議を無視して、彼女たちを部屋の中に突き飛ばす。

「ちよつ…!」

「キャツ!」

二人が驚いている間にすかさず鍵を閉める。

ガオオオオオ!!

ドガアアアン!ドガアアアン!ドガアアアン!

嫌あああ!

ズダダダダダダ!

バリバリバリバリ!

助けてえええええ!

5分程たつたら静かになった。

「……」

「ふむ、さすがに無理だったか」

俺は部屋に入つて二人を助け出した、二人ともボロボロで気を失っている。俺も最初はこんな感じだった。

「さて、次はどうしようかな」

「顔、にやけてるわよ」

特訓はまだまだ続く。

12 話後篇

ここはじいちゃんの家玄関、いるのは俺とユリアだけだ。桜と結さんは居間に寝かせてある。

「もうしばらくしたら二人とも目が覚めると思っから、俺が帰ってくるまで休んでていいって伝えといてくれ」

「いいけど、どこ行くの？」

「そこらへんをちよつとブラブラしようかと思つて。ここに来るのも久しぶりだからな。そうだ、ユリアに渡すものがあつたんだ」

俺はポケットの中から手帳を取り出しユリアに渡す。

「何これ？」

「この家のマニュアル本だ、困つたことがあつたらそれを見てくれ。それじゃ行つてきまーす」

俺はじいちゃんの家を後にした。

遊馬が出かけた数分後桜と結さんが目を覚ました。

「大丈夫？」

「なんとか…」

「ひどい目にあつた…」

ぐったりとうなだれる二人。すごく痛々しい。あの部屋の中がどうなつていたのか気になるが聞かないでおいた方がいいだろう。

「これが後一週間も続くのか…ほんとに死ぬかもな」

結さんはよろよろと立ち上がる。

「あうっ」

しかしバランスを崩して倒れてしまう。

「危ない！」

ガシャーン！

運悪く結さんの倒れた先には高そうな壺があり、見事に割れてしまった。

「や、やってしまった」

結さんの顔がメチャクチャ青くなっている。怪我はないようだが今はそれどころではない。私たちが呆然としていると壺が割れた音を聞きつけたのかお爺さんがやってきた。

「なにかあったのかね？」

部屋に入ってきたお爺さんは壊れた壺を見て動かなくなる。私たち3人も動くことが出来ない。まるで時が止まってしまったかのようだ。

「すみませんでした！」

静寂に耐えられなくなった結さんが土下座してお爺さんに謝る。的確な行動だと思う。お爺さんはとても優しくそうだからきつと許してくれるだろう。

「ふおつふおつ、そうか壊してしまったのか。私の大切な壺を」

あれ、なんかお爺さんの雰囲気が変わった気がする。部屋の温度も1、2度下がった感じだ。

「死ね」

いつの間にか手にした刀でお爺さんが襲いかかってくる。

「「「きやあああ！」「」」

とつさに逃げ出す逃げ出す私たち。部屋から飛び出し廊下を猛ダッシュ。

「まあてえええ！」

そのあとを老人とは思えないスピードで追ってくる。顔がメチャクチャ怖い、鬼の形相とはああいふ顔を言うのだろう。

「なんでこうなるのよおお！」
私は必死に走りながら叫ぶ。

——困った時は……——

私の頭に遊馬の言葉がよぎる。

「あのマニユアル本……」

私は走りながらマニユアル本を取り出し開いてみる。すると1ページ目に「じいちゃんがキレた時の傾向と対策」と書いてあった。

「これだ！」

次のページを開くと、

対策なし。ほぼ死んだと思ったほうがよい。潔く死ぬか最後まであがいて死ぬかは自由。

「何よこれ！全然役に立たないじゃない！」

おもいつきマニユアル本を破り捨てる。こうしている間にもおじいさんは私たちに迫ってくる。

「本当にこのままじゃ殺される！」

「こうなったら！」

結さんは銃をぬきお爺さんに向かって撃つ。しかし……

「甘いわああ！」

刀を一閃して切り落とされてしまった。

「嘘！？」

「遊馬さんのお師匠様です。このくらいは簡単にやってのけるですよ。」

「だいたい予想はついてたけど……」

もう家の外に出て広大な庭を激走している。すると桜が思い出したように言った。

「そういえば大きな蔵がありましたよね？」

「「それだ！」」

私たちは蔵に向かった。

蔵は扉は頑丈そうであのおじいさんでも破ることはできないだろう。

「これからどうすればいいの？」

扉にもたれかかりながらポツリと言う私。

「とりあえず遊馬さんが帰ってくるまでここにいるしかなさそうですね」

「それしかないだろう、私たちにおじいさんを止めることはできない」

私たちが遊馬を待つと決めたその時、私の背後から何かが現れた。見るとそれは刀だった。

「ひい！」

思わず情けない声を出してしまったが今はそれどころではない。すぐに扉から離れて二人の近くに逃げる。刀は人が一人通れるくらいの大きさの穴を開けそこから見えたのはもちろん、

「見いつけあ」

あの死神だった。

死神はゆっくりと私たちに近づいてくる。恐怖で声がでない。この命も後わずかだろう。こんなことなら告白でもしておくんだった。死ぬ事を覚悟した時、まさに奇跡がおこった。

「何をしていますんですかおじいさん？」

「ば、ばあさん！」

「家がボロボロになつているとおもったらこんないたいけな女の子たちをいじめていたなんて」

「ち、違うんじゃない。これには訳が…」

ストン

おじいさんの顔面スレスレに包丁が飛ぶ。

「問答無用」

「ひいひい」

今度はおじいさんが情けない声をあげる。おばあさんはおじいさんを捕まえてどこかへ消えた。

恐怖は去った、しかし時間が止まったように私たちは動かなかった。しばらくすると遊馬が帰ってきた。

「みんな大丈夫か？」

遊馬の顔を見たらいままでためていたものが一気に溢れだした。

「大丈夫なわけ……！」

「うわぁん！、怖かったよぉ！」

が、私が声をあげようとした矢先、結さんが遊馬に抱きつき泣き出してしまった。年相応ではなく体相応の行動に私は驚いて何も言うことが出来なくなった。

「よしよし、もう怖くないぞ」

「ぐすっぐすっ」

蔵の中には結さんのすすり泣きと遊馬があやす声しか聞こえない。

12 話後篇（後書き）

投稿がなかなかできなくてすみません。この小説の更新を待っていてくれた人がいてくれればうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8212h/>

お使いから護衛まで

2010年10月12日14時01分発行